女子新國文

改制新版

卷五

教科書文庫
4
810
42-1943
2000301755

42461
教科書文庫
4
810
42-1943
200030
1755

資料室 375.4 H27

文部省檢定濟
昭和十八年七月十三日　高等女學校・實業學校國語科

教科書文庫
4
810
42-1943
2000301755

女子新國文

改制新版

文學博士　芳賀矢一　編
東京帝國大學教授
文學博士　橋本進吉　訂補

中等學校教科書株式會社

広島大学図書
2000301755

廣島大學圖書之印

廣島大學教 38037 圖書

女子新國文 改制新版 卷五

目次

一 みやこの春(古歌)……二
二 六歌仙と三十六歌仙……兒山信一……六
三 みくにまなび……平田篤胤……一二
四 月の三月堂……東伏見邦英……一六
五 光堂……泉鏡花……三三
國寶建造物の保存(自修文)……關野貞……三九
六 阿新丸その一……(太平記)……四〇

七 阿新丸その二……（太平記）…四四
八 炭燒の娘……長塚節…五三
九 生活に伴なふ婦人の自覺……高島平三郎…六〇
一〇 短夜の頃……島崎藤村…六三
一一 神國の首都……小泉八雲…七〇
一二 美しい自然と國民性……七七
みやびの心（自修文）……八五
一三 鼎法師……吉田兼好…九一
一四 繩はね（詩）……白鳥省吾…九六
一五 初夏のパリ……吉江喬松…九七
一六 歐米の婦人を觀る……堀口九萬一…一〇五

一七 雲のいろ〳〵……幸田露伴…一一三
一 夜の雲……一一五
二 雨後の雲……一一三
三 坂東太郎……一一四
四 いわし雲……一一六
五 かさぼこ雲……一一七
六 かなとこ雲……一一七
一八 隅田川の今昔……一一八
花火の趣味（自修文）……西澤勇志智…一二六
一九 人間の智慧……一三三
一 松葉仙人……（十訓抄）…一三三

廣島大學圖書之印

二 腰居の釜……（古今著聞集）…一二四
二〇 人事と天命……加藤武雄…一三五
二一 尊い獻身の生涯……高須芳次郎…一四〇
二二 ふじの山（狂歌）……一五〇
二三 親の心……水上瀧太郎…一五五
二四 空行く雁……（異本曾我物語）…一五九
二五 三つの眺……一六三

みくにはし日の神國とひとくさの心もなほしおこなひもよし　本居宣長

くにぐの君はかはれど高光るわが日の御子の御代かはらず　同

女子新國文

改制新版　卷五

凡河内躬恒　平安時代初期の歌人。延喜七年（一五六七年）歿、年四十九。

壬生忠岑　平安時代初期の歌人。生歿年未詳。

素性法師　平安時代初期の歌僧。僧正遍昭の次子。傳未詳。

紀友則　平安時代初期の歌人。古今集撰者の一人。傳未詳。

一　みやこの春

世を捨てて山に入る人山にても
　なほうきときはいづち行くらん　　凡河内躬恒

久方の月の桂も秋はなほ
　もみぢすればや照りまさるらん　　壬生忠岑

見渡せば柳櫻をこきまぜて
　みやこぞ春の錦なりける　　素性法師

さみだれにもの思ひをれば郭公
　夜ぶかくなきていづち行くらん　　紀友則

在原元方　平安時代中期の歌人。

坂上是則　平安時代中期の歌人。傳未詳。

源順　平安時代中期の歌人。學者。永觀元年（一六四三年）歿、年七十三。

大中臣能宣　平安時代中期の歌人。正曆二年（一六五一年）歿、年五十九。

かすみたつ春の山邊は遠けれど
　吹きくる風は花の香ぞする　　在原元方

みよし野の山のしら雪つもるらし
　ふるさと寒くなりまさるなり　　坂上是則

水の面にてる月なみをかぞふれば
　こよひぞ秋のもなかなりける　　源順

白雪のまだふるさとの春日野に
　いざうちはらひ若菜つみてん　　大中臣能宣

源俊頼　平安時代末期の歌人。金葉集の撰者。歿年未詳。

藤原俊成　平安時代末期の歌人。千載集の撰者。元久元年（一八六四年）歿、年九十一。

藤原定家　鎌倉時代初期の歌人。俊成の子。新古今集撰者の人。仁治二年（一二四一年）歿、年八十。

藤原家隆　鎌倉時代初期の歌人。新古今集撰者の一人。嘉禎三年（一二三七年）歿、年八十。

夏の終り　秋の初

かぜ吹けば蓮のうき葉に水こえて
　涼しくなりぬ日ぐらしのこゑ　　源俊頼

夕されば野邊の秋風身にしみて
　うづら鳴くなり深草の里　　藤原俊成

駒とめて袖うちはらふかげもなし
　佐野のわたりの雪のゆふぐれ　　藤原定家

下紅葉かつちる山のゆふ時雨
　ぬれてやひとり鹿のなくらん　　藤原家隆

花にそむこゝろのいかで殘りけん
　すて果てにきと思ふわが身に　　西行法師

寂蓮法師　鎌倉時代初期の歌僧。新古今集撰者の一人。撰の中途で建仁二年（一八六二年）寂、寂年未詳。

藤原爲家　鎌倉時代中期の歌人。建治元年（一二七五年）歿、年七十八。

大海の磯もとゞろによる波の
　われて碎けてさけて散るかも　　源實朝

成數の意

今はとてたのむの雁もうちわびぬ
　おぼろ月夜のあけぼのゝ空　　寂蓮法師

早瀬川波のかげこす岩岸に
　こぼれて咲けるやまぶきのはな　　藤原爲家

二　六歌仙と三十六歌仙

兒山信一

兒山信一　國文學者。靜岡縣の人。昭和六年歿、年三十二。本文は特に本書の爲に執筆したもの。

武將または學問藝能の士で相並んで優れた數人を纏めて、例へば、四天王とか十哲とか稱する事がある。

和歌の方面では、平安朝の初期に六人の優れた歌人があつて、六歌仙と呼ばれてゐる。卽ち在原業平、僧正遍昭、小野小町、文屋康秀、大友黑主、喜撰法師の六人である。この六人は萬葉集と古今集との中間の時代に出て、一旦衰へようとした和歌を再び隆盛の運に向はせたのである。

在原業平はもと皇族の出であつて、卽ち平城天皇の皇孫に當るのである。春の花の咲くのを見、秋の木の葉の散る音を聞いては浮ぶ感情を、或は優美に、或は溫雅に、そのまゝ歌ふ風流の貴公子であつた。けれども、決して柔弱浮薄な人物ではなかつた。學問もあり、敎

遍昭　寬平二年（一五五〇年）寂、年七十五。文屋康秀　淸和、陽成の兩天皇に仕へた。大友黑主　近江國大友鄕の人。貞觀中、園城寺の別當に補せられた。喜撰法師　桓武天皇の裔。平城天皇　第五十四代。

養も高く、學止言動その宜しきを得、すべて文化的に洗煉された紳士であつて、曾て外國の貴賓を接待する役を仰せ附けられた事もあつたのである。

僧正遍昭も皇族の出であつて、桓武天皇の皇孫に當るのである。在俗の時の姓名は良岑宗貞と言ひ、仁明天皇に仕へて御信任を得たが、天皇の崩御を悲しみ奉り、それを動機として出家し遍昭と稱した。七十歲の老齡に達した時、特に光孝天皇から七十の賀宴を賜はり、一代の光榮に感泣したのであつた。

同じく六歌仙と言はれてゐながら、業平と遍昭とを除いた他の四人は、いづれも傳記の詳細が傳へられてゐない。殊に喜撰法師の如きはながら、歌も餘り多くは殘つてゐず、歌人とは稱せられ

わが庵は都のたつみしかぞすむ
世をうぢ山と人はいふなり

仁明天皇　第五十四代。光孝天皇　第五十八代。うぢ山　京都府宇治郡笠取村の西。一名喜撰嶽。

宇治山に住んでゐた事が知られるばかりである

後の時代の優雅な女性的な和歌の世界

六歌仙（寺崎廣業筆）

の一首が傳はつてゐて、宇治山に住んでゐた事が、知られるばかりである。

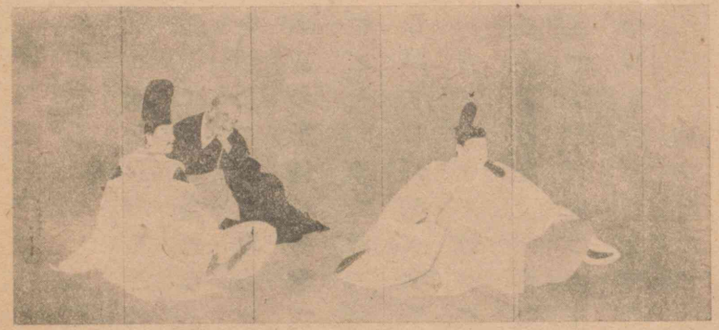
小野小町は六歌仙中唯一の女性である。歌に優れた才能をもち、單に六歌仙としてのみならず、平安朝を通じての代表的女流歌人として記憶さるべき者である。しかも平安朝の初頭に立ち、女性のおのづからなる優美な感情と纖細な技巧とに於て、後の時代の優雅な女性的な和歌の世界に對して、まさに魁をなした者と言ふべきである。

平安朝の中期に藤原公任といふ有名な歌人があつて、この人が古來の優れた歌人三十六人を選んだのが卽ち三十六歌仙で

柿本人麿持統、文武、元明天皇に仕へた。晩年石見に赴任し、其所で歿した。

山邊赤人聖武天皇に仕へた。敍景の歌に勝れてゐた。

歌仙がやがて歌神となつたのである



六歌仙（寺崎廣業筆）

ある。三十六歌仙にはどういふ人たちが數へられてゐるかと言ふに、まづ奈良朝の歌人に柿本人麿と山部赤人とがある。

人麿と赤人とは早くから歌人としての名が高く、相並んで和歌の二聖とも呼ばれてゐるが、殊に人麿は後世に至つて歌神として尊崇されるやうになつた。六歌仙にしても三十六歌仙にしても、歌仙と言へば歌の名人といふ程の事であつて、勿論後世の歌人から欣慕尊敬されたのであるけれども、その欣慕尊敬の對象が人格から終に神格化された時、卽ち歌仙がやがて歌神となつたのである。人麿がそれである。

粟田兼房　平安時代中期の歌人。晩年人麿の畫像を日河天皇に獻じた。

夢が覺めるとすぐに繪師を呼び

清原元輔　平安時代中期の歌人。正暦元年（一六五〇年）歿、年八十三。

醍醐天皇　第六十代。延喜年間（一五六一―一五八二年）。

粟田兼房平安時代中期の歌人。晩年人麿の畫像を日河天皇に獻じた。

夢が覺めるとすぐに繪師を呼び

清原元輔平安時代中期の歌人。正暦元年（一六五〇年）歿、年八十三。

醍醐天皇第六十代。延喜年間（一五六一―一五八二年）。

粟田兼房といふ人が特に深く人麿を崇拜し、常にこれを心に念じてゐたが、その念願が屆いたものか、或夜の夢に、人麿が左手に紙を持ち、右手に筆を持つた老翁の姿で現れた。兼房は狂喜感激して、夢が覺めるとすぐに繪師を呼び、夢に見た通りの老翁の姿を話して寫し取らせ、その畫を祕藏して朝夕禮拜してゐた。これが人麿の影像の濫觴であるといふ。その後かうした人麿の影像を掲げて、その前で歌の會を催す事なども行はれ、人麿を歌の神として崇拜する傾向が次第に著しくなつたのである。

さて三十六歌仙に數へられる人々には、外に紀貫之、凡河内躬恆、壬生忠岑、紀友則、源順、大中臣能宣、清原元輔などがあるが、中で紀貫之は、醍醐天皇の延喜年間に敕命を奉じて、他の歌人たちと共に古今集を撰進した時の中心的人物であつたので、彼自身もとより歌に巧であつたのではあるが、後世古今集が尊重されるにつれて、貫之の名も次第に重きをなすに至つた。

伊勢　平安時代初期の歌人。藤原繼蔭の女。第五十九代宇多天皇の后七條后に仕へた。

中務　醍醐天皇の皇子敦實親王を父とし、伊勢を母として生れた。生歿年不詳。

齋宮女御　平安時代中期の歌人。名は徽子。式部卿重明親王の女。朱雀天皇の時の齋宮。村上天皇の皇后となつた。寛和元年（一六四五年）歿、年五十。

三十六歌仙の中には伊勢、中務、齋宮女御等の女流歌人もあるが

琴のねに峯の松風かよふらし
いづれの緒よりしらべそめけん

といふ齋宮女御の御歌は、殊に有名である。

かやうに、六歌仙並びに三十六歌仙は、言ふまでもなくいづれも歌に秀でた人たちであるが、六歌仙はその六人が同じ時代の歌人であつたのに較べて、三十六歌仙に數へられる三十六人は、奈良朝から平安朝の中期にまで及んでゐて、同じ時代の人たちではない。そして後者には前者のうち、業平、遍昭、小町の三人が含まれてゐる。選ばれた歌人の時代といふ點での性質上、三十六歌仙に類するものに、藤原定家の選であると言はれる小倉百人一首があるが、六歌仙並びに三十六歌仙に屬する歌人で、この百人一首にも名を列ね

小倉百人一首があるが

古い本などに見る事が出來る

平田篤胤江戸時代末期の國學者。羽後の人。天保十四年（一八四三）歿、年六十八。

ないでござる

てゐる者が非常に多い。要するに、これ等の人々が優れた歌人であるといふ事は、衆評の一致するところであると言ふべきである。

百人一首はかるたによつて一般に普及してゐるが、なほ百人の歌人の肖像を描き、それ〳〵に歌一首づつを書添へたものを、古い本などに見る事が出來る。同じやうに、歌人の肖像を描いて、それぞれに歌一首づつを書添へた三十六枚の掛額を、神社などに見る事があらう。これは卽ち三十六歌仙の掛額であつて、普通に歌仙額と稱せられるものである。

三　みくにまなび

平田篤胤

學問にはいろ〳〵ある。その中に何の學問がいつち大きいぞと言ふに、ちと自分勝手のやうなれども、皇國卽ち我が國の學問程大きいものはないでござる。なぜと言ふに、まづ近く儒學と佛學との

さしてかたい事はありやいたさん

儒者がおもと讀まねばならぬ書物

上で申さば、儒者は最初四書五經とか、十三經とかいふ類の書物を讀む事を覺え、また左國史漢と言つて、左傳といふもの、國語といふもの、史記といふもの、漢書といふものなどをあら〳〵讀んで、さて漢文を綴る方を覺えたり、そのふだんの口ずさみに詩を作る事でも覺えると、もう儒者と言つて通られるが、何のこれしきの書物を讀んで、これしきの事を覺ゆるに、さしてかたい事はありやいたさんでござる。大方世間の儒者は、皆このくらゐなものでござる。

さてその儒者に比べては、出家の方がよつぽど廣い。なぜと言ふに、己が是非讀まねばならぬときめた俗に言ふ經文が五千餘卷、馬につけたならば、七八駄あらう。それをみんな讀まず、十分の一を讀んだところが、ざつと儒者がおもと讀まねばならぬ書物の一倍もあるでござる。それのみならず、儒者は佛書を讀まんでも事が缺けぬによつて、とんと讀まず。たまさか佛書を讀む儒者もあれど、そり

また詩も漢文も儒者と同じやうに作りもする

その通り入混つてある故に

蘇子由　宋の蘇軾の弟轍。政和二年（西紀一一一二年）歿、年七十四。

や百人に一人もない。僧徒はそれと事かはり、儒者のおもと見る書物をば子供の時から文字を知る爲に讀んで置く。また詩も漢文も儒者と同じやうに作りもする。そこで僧徒の學問は儒者よりは廣いでござる。

さて皇國の學問がいつち廣いと言ふ故は、右申す通り、儒學、佛學をはじめ、種々さまく〳〵の學問があつて、その道のこゝろと事とが、悉く皇國の學び事に混雜して、譬へば、彼の八紘九野の水、天漢の流これに注がずといふ事なしといふ如くでござる。その通り入混つてある故に、人の心もそれに從つて移り、いづれを是とも、いづれを非とも分ちかねて、言はゞまごついてゐる事が多くある。それ故に、その混雜をつぶさに分けねば、眞の道のありがたきところも顯れず、その混雜をより分けて、まことの道の害となる事をいひ顯さうとするに就いては、よく先方の事をも知らねばならず。かの唐人蘇子由といふ者の、「善く人と言ふ者はその人の言に因つて而して之が言をなせば、則ち天下の辯者服す。云々」と申したる如く、此方の事ばかり言つたのではいかず。例へば、僧徒を諭すには佛書で言ふと、ぎうの音も出ず。儒者を諭すには儒書で論ずれば、猫に迫はれた鼠のやうに畏まる。されば皇國の純らと正しい道を得ようとするには、それに心得なくてはかなはぬ事でござる。殊にもろ〳〵の學問の道、たとひ外國の事にしろ、皇國人が學ぶからは、そのよき事を選んで、皇國の用にせうとの事でござる。さすれば、實は漢土は勿論、天竺、阿蘭陀の學問をも、すべて皇國まなびと言つても違はぬ程の事で、卽ちこれが皇國人にして外國の事を學ぶ者の心得でござる。（古道大意）

思ふ旨ありて家のはしらにかきつけゝるうた

花鳥を吾も哀と見てはあれとあはれと歌ふいと無りけり　篤胤

用にせう

平田篤胤筆蹟

東伏見邦英伯爵。故久邇宮邦彦王の第三王子。明治四十三年御誕生。昭和六年勅命により臣籍に降下し東伏見家を創立された。サロン（客室）

菊水奈良市内にある旅館。

ぼんやりとしか見えませんが

四　月の三月堂

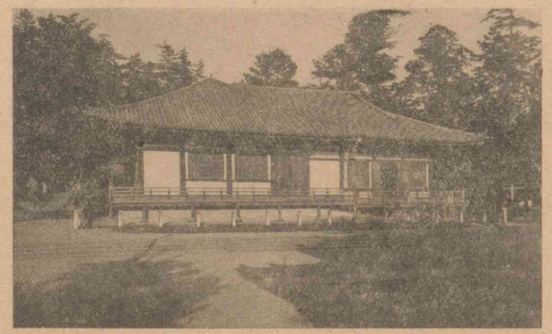
東伏見邦英

法隆寺へ行つた日の夜の事でした。晝間あんなに我々を苦しめた雨は、夕食の濟んだ頃にはすつかり止んで、サロンの窓を明けると、すが〳〵しい風が靜かにカーテンのレースを靡かせてゐました。まだ止んで間もないと見えて、木の葉といふ葉、草といふ草は悉く露を宿して、美しく輝いてゐます。新池の上には一面に靄が立籠めて、菊水の燈火はぼんやりとしか見えませんが、三絃の響は靄を縫つて廣がつて來ます。春の夜短しと宴まさに酣なのでせう。この靜寂な古都の朧夜に、どこからともなく傳はり來る樂の音も詩趣の多いものですが、それにもまして力强く私に迫るものは、すべての不淨を流し去つた時の大地の匂と、梢から滴る水の音とです。ぽたり、ぽたり、またぽたり、椿の花が水面に落ちるやうな、そしてもつともつと澄んだ、晴々した、落著のある、底力のある音です。今眼の前の一滴が落ちました、きら〳〵と美しく光りながら。

今晩は滿月に當つてゐます。月に對して特別の感興を起す私は、この二三日御蓋山から登る月を、どんなに喜んで見てゐたか知れません。四月の滿月はイースターの日を定めます。全キリスト教徒にとつては、何等かの意義ある滿月です。しかし、雨は止んだとは言へ、空一面は薄雲で覆はれ、あたら名月は徒に雲の裏面のみを照して、薄雲を通してもれる光は、見る人をして夢のやうな淡い感じを起させます。

御蓋山奈良縣添上郡。その形が笠に似てゐるのでこの名がある。三笠山とも書く。安倍仲麿の歌によつて名高い。海拔二八二メートル。

イースター　キリスト復活祭のこと。キリスト教では三月二十一日以後に來る滿月後の第一日曜日を復活祭日とする。



三　月　堂

高圓山　御蓋山の西南。

いらか（甍）

三月堂　一名法華堂。天平五年（一三九三年）良辨僧正の創建。奈良に於ける最古の建造物。

南大門　東大寺大佛殿の正門。

嫩草山　御蓋山の北。緩やかな傾斜をなし滿山美しい芝草で覆はれてゐる。

ふと目を窓外に移すと、さつきまで大空を閉籠めてゐた薄雲は、何時の間にか拭ひ去られて、月が出てゐるではありませんか。あの憧れの明月が。もう御蓋山からは大分離れて、高圓山のあたりに輝いてゐます。思はず私は外へ飛出してしまひました。新池の面に崩れる月。五重塔のいらかの反射。我々の足は知らず識らず三月堂へと向つて、公園の中を、少し寒いので、せつせと歩いてゐました。奈良朝の我々の祖先の幾家族かは、何代かに亙つてこの邊にも住んでゐたでせう。そして月明の夜などには、やはりこの雪消の澤の畔を、さまよつた事もあつたでせう。人一人通らぬこのあたりの大木の梢に隱見する月は、ちよつと凄く感じられます。我々は南大門の方へ曲る路を間違へたので、結局嫩草山の麓から三月堂へと廻る事になりました。晝間の賑かさに較べて夜の靜けさ、何とひどい變化でせう。月と、松と、嫩草山と、路と、そして我々の影法師と、他に何も動

土產物を賣る店はすつかり閉ぢて

手向山八幡　東大寺の鎮守神。第四十五代聖武天皇の勅願により宇佐の神託により奈良に勸請し奉つた。

三月堂よ何とお前の姿の美しい事だらう

きません。土產物を賣る店はすつかり閉ぢて、料亭も軒端にたつた一つ灯が寂しくついてゐるだけです。

嫩草山は靜かに眠つてゐる。鹿もゐない。時々松が風に搖れる。路が光り、路の小石が光る。光る路の上を影法師がする〳〵動いて行く。そして手向山八幡の横から三月堂の前に出ました。鎌倉時代の附加である三月堂の低い禮堂の屋根が、月の光をいつぱいに浴びてゐます。

月光菩薩

三月堂よ、何とお前の姿の美しい事だらう。すつかり私の心はお前に捉へられてしまつた。私は決して始めてお前を見たのではな

月光　彩色した塑像。日本美術史上最も有名な傑作。天平時代の製作にかゝる。

日光　月光と並び稱せられる。

乾漆の大きな像が澤山ある　乾漆像が澤山ある

及ぶべくもない　及ぶべくもない

い。幾たびかお前を訪れた事がある。しかも一度もお前の姿を氣を附けて見た事がなかつた。私がお前を訪れるのは、お前の中にしまつてある月光に會ふ爲だ。月光にさへ會へれば私は滿足して、さつさと歸つてしまつたのだ。日光もいゝ。執金剛神もりつぱだ。御廚子の中の吉祥天も辨財天もいい。殊に吉祥天のあのうぶな顏に私は愛著を覺える。しかし、私はそのどれよりも月光が好きだ。まだ外に乾漆の大きな像が澤山ある。第一に本尊がさうだし、梵天も帝釋も、四天王もさうだ。それに木彫の不動二童子、地藏の半跏踏下像もある。どれもこれも皆りつぱな作品ではある。が、私の心に映ずる月光の姿には及ぶべくもない。私は

月　光　像

そして私はお前の美しさに魅せられてしまつたのだ

もがく（跪）

祕密を探らうとした私の考が、抑間違つてゐたのだ

三月堂へ來て、何時も月光を見て歸つたと言つてもいゝ。今日はいくら見たくたつて、扉がしまつてゐる。あの清らかな姿、あの熱情の籠つた信仰の權化の姿を思ひ浮べながら、私はお前の周りを歩き廻つた。そして私はお前の美しさに魅せられてしまつたのだ。それからお前の美の祕密を探らうとした。しかし、お前の祕密は到底我々にはわからない。いくらもがいたところで、月光が永遠に私の心を壓倒したと同じやうに、お前の美は私を壓倒してしまつた。祕密を探らうとした私の考が、抑間違つてゐたのだ。たゞ私はお前の美しさの中に溶けこんでしまへばよかつたのだ。さうすれば、お

吉祥天

前の美しさが、優れた藝術家の直觀であつたにしても、私の心はその藝術家の美しい境地に到達し得るはずだつたのだ。時間の藝術、音の藝術の上で私はたび〳〵それを經驗した。今は空間の藝術、建築の上でそれを味はひ得る。それはお前と、お前に小さな黑い影を落してゐる私との對立の上に存在するものではない。この二つのものの間にあるすべての障碍は取除かれ、私の心は全くお前の美に抱擁されてゐる。それは藝術の領域を越えて、宗教の領域にはいつてゐるのだ。私はこの宗教的な境地に、十分に陶醉し得る私を幸福だと思ふ。どんなに偉い宗教家だつて、この境地に到達し得る事は、一生のうちにさうたび〳〵あるものではあるまい。私は藝術を媒介とした方が、ずつと樂にこの境地に到達し得るものだと思ふ。

月はもう大分傾きかけた。しかし、私は二月堂へ上つて、あの舞臺から、月に照された生駒山の方を見たいやうな氣がする。お前の美しさに驚きながら、私はもうお前と別れねばならない。

その藝術家の美しい境地に到達し得るはずだつたのだ

宗教的な境地に十分に陶醉し得る

二月堂　三月堂の北隣。手向山の西麓丘上に聳え立つてゐる。

生駒山　奈良縣と大阪府との境界にある。海拔六四二メートル。

五　光　堂

泉鏡花

山路二町ばかり、中尊寺はもう近い。

大きな廣い本堂に、見上げるやうな釋尊の外、寂寞として何もない。それが莊嚴であつた。日の光が幽かにもれた。

裏門の方へ出ようとする傍に寺の廚があつて、其所で巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、初め藥師堂、次に寶物庫、さて金色堂いはゆる光堂、續いて經藏、辨財天といふ順序である。皆參詣の人を待つて、始めて扉を開く。すぐまたあとを鎖すのである。寶物庫には番人がゐて、經藏には年紀の少い出家が、火の氣もなしに、一人經机に向つてゐた。

初め藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、此所の番人

泉鏡花　小說家。名は鏡太郎。金澤市の人。昭和十五年歿、年六十八。

裏門の方へ出ようとする傍に寺の廚があつて

いはゆる（所謂）

年紀の少い出家が

八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ

けれどもそれのみには限らない

のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ、且芝生に散つて、さながら敷いたやうであつた。

櫻は中尊寺の門内にも咲いてゐた。麓から上らうとする坂の下の取附の所にも、一本見事なのがあつて、山中心得の條々を記した禁札と一緒に、確か「淺葱櫻」といふ札が立つてゐた。けれどもそれのみには限らない。所々汽車の窓から見た櫻は、奥が暗くなるに隨つて、ぱつとさえを見せて咲いたのはなかつた。薄墨、鬱金、また淺葱といつたやうな、どの櫻も皆ぼつとりとして曇つて、暗い紫を帶びてゐた。雲が黑かつた爲かも知れな

金色堂外觀

階の前の花片が、をりからの冷い風にばら〳〵と誘はれてさつと散つて

黃金の剝げた黑漆とは思はれない

い。

と、階の前の花片が、をりからの冷い風にばら〳〵と誘はれてさつと散つて、この光堂の中を空ざまにひらりと紫に舞ふかと思ふと、羽目に浮彫した孔雀の尾に、玉を刻んで綠青にさびたのが、なほ嚴かに美しい、その翼をばら〳〵と叩いて、ちら〳〵と床にこぼれかゝるやがて宙で黃金の卷柱の光を受けて、ぱつと金色に飜るのを見た時には、思はず驚歎の眼を見張つた。

床も、長押も、柱はもとより、佇む所、踏む所は、黑漆の落ちた黃金である。黃金の剝げた黑漆とは思はれないで、しかも些のけば〳〵しい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。我等仙骨をもたない身も、この雲は踏んでも破れぬ。その雲を透かして、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しい虹をそのまゝ柱にして描いた十二光佛の微妙な種々相は、一つ〳〵錦の絲に白露

玲瓏として珠玉の中に顯れて

清衡陸奥押領使。後三年の役、源義家に與して出羽清原氏を攻めてこれを滅し、功によりて清原氏の地を領した。もと基衡の子、秀衡その後を承け、代々平泉にあつて勢を振つた。

きら〳〵と輝くなの塵を不思議と見れば

を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中に顯れて、清く明らかに、しかも幽かな幻である。その十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流れるが如く輝かして、寶相華、勝曼華が隙間もなく咲きめぐつてゐる。

この柱が須彌壇の四隅にある。まことに天上の柱である。須彌壇は三座あつて、壇上には彌陀、觀音、勢至の三尊、二天、六地藏が安置され、壇の中には眞中に、清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、此所に各一口の劍を抱き、鎮守府將軍の印を帶び、錦袍に包まれた三つの屍が、まだそのまゝに横たはつてゐるさうである。

雛芥子の紅は美人の屍より咲いたと聞く。光堂は此所に三個の英雄が結んだ金色の果なのである。

謹んで辭して、天界一叢の雲をおりた。

階をおりざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巣がかゝつて、風に輕く吹かれながら、きら〳〵と輝くのを、不思議な塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。またいやが上に懷かしい。

羽目には天女、迦陵頻伽が髣髴として舞ひつつ、奏でつゝ、浮出てゐる。影を受けた束、貫の材は、鈴と草の花との玉の螺鈿である。

漆塗、金の八角の臺座には、本尊文殊師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口をあけた、青い毛の部厚な横顔が見られるが、づゝつと足を擧げさうな構である。右にこのくつわを取つて、ちよつと振向いて、菩薩にものを言ひさうなのが優闐王、左に一匣を捧げたのは善哉童子、この兩側左右の背後に淨名居士と佛陀波利とが、一は拂子を振り、一は

くつわ（轡）

螺鈿八角須彌壇

毛越寺　平泉にあつた寺。鳥羽天皇の敕願所で藤原基衡の建立。今は常行法華の二堂を殘すのみであるが、土壇礎石等が存し當時の規模を知る事が出來る。

ひいき（贔屓）

錫杖に一軸を結んだのを肩に擔ぐやうに杖ついて立つ。髭も、額も、目も、眉も、そのいづれも莞爾々々として、文殊も微笑んでまします。第一獅子が笑ふのである、獅子が。

この須彌壇を左に一架を高く設けて、此所に紺紙金泥の一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥、銀泥で、本經の圖解を描く。清麗巧緻で、且神祕である。

今此所に來てこの經を見ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧げるが如く、これは月光を仰ぐやうであつた。

架の裏に色の蒼白い痩せた墨染の若い出家が一人ゐた。私の一禮に答へて、「おゆつくり御覽なさい」。

二三の散佚はあらうが、言ふまでもなく、堂の內壁にめぐらした八つの棚に滿ちて、二代基衡のこの一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書の一切經、並びに判官びいきの第一人者三代秀衡老雄の奉納した黃紙宋板の一切經が、皆黑燿の珠玉の如く漆の架に滿ちてゐる。一切經の全部量は、七駄片馬と稱へるのである。

「拜見をいたしました」。

「はい」と腰衣の素足で立つて、すつと經藏を出て、ほゝ齒の高足駄で、卷袖で、寒くほつそりと草を行く。淸らかな僧であつた。

（鏡花全集）

ほゝ（朴）

關野貞　建築學者。工學博士。新潟縣の人。昭和十年歿、年六十八。本文は特に本書の爲に執筆したもの。

建造物　つくりたてたもの。建築物。

さはら（椹）

つが（栂）

自性文

國寶建造物の保存

關野貞

我が國の建造物は、西洋諸國のが石造や煉瓦造であるのとは違つて、昔から木造本位で通して來た。その主な原因は、我が國土が森林に富み、檜や、けやきや、杉や、さはらや、つがのやうな建築的良材の供給が豐富であつたからと、木造建築が最もよく我が國の風土、氣候に適應してをつたからとである。また我が國のやう

鐵骨構造　鐵材を骨組とする家屋の構造。

鐵筋コンクリート構造　鐵棒とコンクリートとを組合せて鑄固める構造。

石造　石を積重ねて壁を作り、重みを受けさせる構造。煉瓦造は石の代りに煉瓦を用ひる。

耐震的　地震に耐へる性質のあるのをいふ。

奇蹟　その理由の解きやうもない不思議な現象。

建築樣式　主として趣味の上からおのづから造り出された建築の型。その型は國民や國土の性質によつて種々の物が生ずる。

に頻繁に地震に襲はれる所では、今のやうに鐵骨構造や鐵筋コンクリート構造の發明される以前には、木造建築が石造や煉瓦造の建築よりも、一層耐震的であつたのである。

しかし、木材は腐朽し易く、且火に最も弱い缺點がある。それにも拘らず、我が國には古建築の遺存してゐるのが比較的多く、千三百年來の木造建築を、各時代を通じて殆ど缺陷なく今日まで保存してゐる。これは全く外國には類例のない事で、實に世界の奇蹟と言つてもよい。

我が國には千年以前に建てられた建築は約三十ばかり遺つてゐるが、世界の他のいづれの國に於ても、千年前の木造建築は絶對に存在してゐない。また我が國には、六百年前即ち鎌倉時代頃より前の建造物は約三百も遺つてゐるが、昔時、我が國にりつぱな建築樣式を輸入して、我が國の建築の發達を助けた朝鮮には、六百年前のものがたゞ一棟遺つてゐるに過ぎない。支那は大

文化史　學問、藝術、政治、教育、風俗、經濟等の發達變遷を明らかにする歷史。

國であるに拘らず、六百年前のものはわづか十棟か二十棟しか遺つてゐない。即ち東洋の古代建築の實例は、主として我が國に於てのみ多くこれを見る事が出來るのである。

かやうに古代の木造建築が多數我が國にのみ遺存してゐるのはいかなる理由であるか。それにはいろ〳〵の原因があるが、その根本原因は、畢竟萬世一系の皇室を戴いてゐる我が莊嚴な國體の賜である。他の國々では幾たびかの革命の變亂があつたり、また外國の侵略を受けたりした結果、古い建造物は次第に破壞され、消滅してしまつたのである。

實に我が國の古い建造物は、我が國の文化史の活きた證據であり、また東洋建築の貴重な代表者であつて大いに世界に誇るべきものであるから、我が國民には十分にこれを愛護し、これを無事に永く子孫に傳ふべき義務がある。

我が國に於て最も多くの古い建造物をもつてゐるのは古社

明治三十年
二五七年。

國庫
國家の資金を統一して保管する所。

芝、上野の靈廟
芝公園内には徳川二代將軍裏方靈屋及び徳川二代將軍、同六代將軍、同七代將軍の靈廟があり、上野公園内には四代及び五代將軍の靈廟がある。

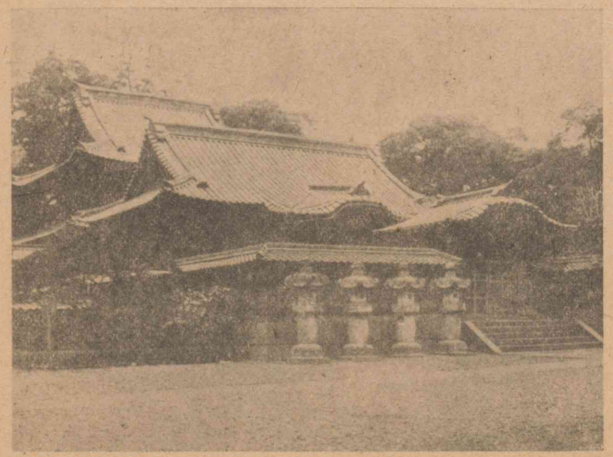
姫路城
姫路市。一名白鷺城。

岡山城
岡山市。一名烏城。

寺であるが、この古社寺の中には、明治維新後、經濟上の關係から十分に保護する力がなかつた爲に、貴重な建造物中にも、次第に破損頽廢する危險に瀕したものもあつた。政府はこゝに見るところがあつて、明治三十年六月古社寺保存法を制定し、これ等の建造物の優秀なものを特別保護建造物に指定して、その破損の甚だしいものから、毎年國庫より相當の保存金を下附して修理を實行した。その爲に多數の古代建築の主要なものを、辛うじて頽廢から救ふ事が出來たのである。

然るに古社寺以外の建造物、例へば東京の芝や上野の御靈屋のやうな靈廟建築、姫路城や岡山城の天守のやうな城郭建築などは、その價値に於て決して古社寺の建造物に讓らない貴重なものであるが、これ等は社寺に屬しないで、或は個人の所有であつたり、或は國有または公共團體の所有などであつたりする爲に、古社寺保存法ではこれを特別保護建造物に指定する事が出來ず、いかにその破損が甚だしくても、保護の途が全くなかつたので、心ある者は常にこれを遺憾に思つてゐた。昭和四年三月、政府は古社寺保存法の代りに、新たに國寶保存法を發布して、社寺以外の建造物も、その貴重なものは國寶に指定する事となり、また保存上必要な場合には、古社寺同樣、國庫より修理費を補助する事が出來るやうになつた。

かく新國寶保存法が出來た爲に、社寺以外の建造物で新たに國寶に指定されたものを擧げてみると、昭和五年度に於て、江



芝增上寺の靈廟

福山城　福山市にある。
廣島城　廣島市にある。
池田侯爵　貴族院議員池田仲博。

戸時代を代表する莊麗華美な芝や上野の靈廟があり、同六年度に於て、公共團體の所有では、從來離宮であつたのを名古屋市に御下賜になつた名古屋城の天守や御殿があるし、國有では姫路城の天守、福山城の天守、廣島城の天守、並びに池田侯爵家所有の岡山城の天守などがある。

これ等我が國に於て獨得の發達をなし、世界に比類のない靈廟建築や城郭建築が、國寶として國家の保護を受ける事が出來るやうになつたのは、まことに喜ばしい事と言はなければならない。

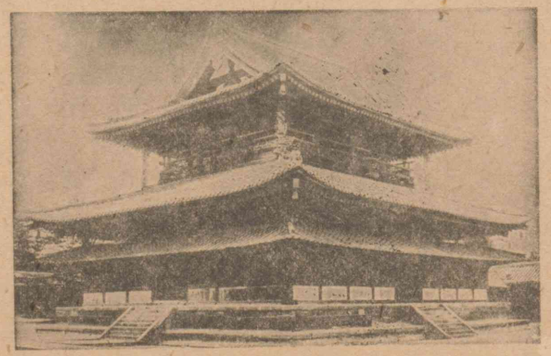
從來指定された國寶建造物の總數は千四百七十三棟であるが、その中には、世界最古の木造建築である大和の法隆寺の金堂、五重塔、中門、廻廊、並びに法隆寺の近くにある法起寺及び法輪寺の兩三重塔がある。いづれも千三百餘年前のもので、かゝる古代の建築が、獨り我が國にのみ保存されてゐるのは、實に世界の驚

從來指定された云々　昭和八年九月現在。
法起寺　奈良縣生駒郡富郷村。法隆寺の末寺。
法輪寺　同村。眞言宗。京都東寺の末寺。

三十三間堂　京都市東山區。天台宗。本名は蓮華王院。堂の長さ六十四間五尺。二間ごとに柱があつて、柱間が三十三あるので三十三間堂と稱せられる。

異である。

また世界最大の木造建築では東大寺の大佛殿がある。世界最高の木造建築では京都の東寺の五重塔がある。世界最長の木造建築では京都の三十三間堂がある。尤も石造や煉瓦造の建築では、外國にはもつと大きな、もつと高い、もつと長い建物もあるが、木造建築では、我が國の今擧げた建造物に及ぶものはない。次に世界最美の建築の一に數へられ、また實際木造建築としては確かに世界最美を誇る事が出來る日光の靈廟がある。

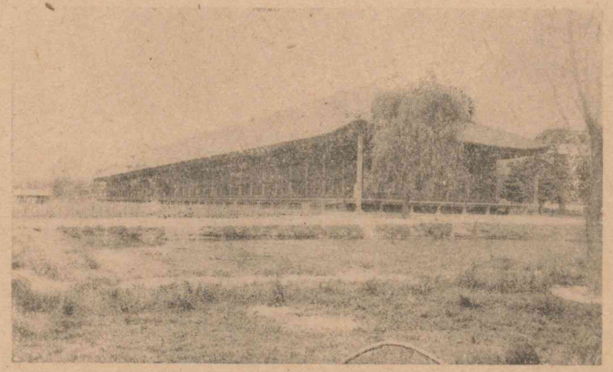


法隆寺金堂

これ等の外、どの國寶建造物も、それ〴〵の時代の樣式を代表

眞相　まことのありさま。ほんたうのすがた。

して、昔時の文化の眞相を語るのみでなく、支那や朝鮮に於て早く消滅した東洋建築の樣式を代表してゐるのである。



三十三間堂

これ等國寶建造物を修理する場合には、その建造物の所有者は、修理費の半額以上を負擔する事が原則となつてゐるが、事情によつては、その所有者の負擔額を輕減する事が出來る。從來の例では、所有者の經濟力の如何によつて半額以上、場合によつては全額を負擔したものもあるが、また反對に一二割、甚だしきは五分くらゐしか負擔の出來なかつたものもある。

國寶建造物の保存に對する國庫よりの補助年額は、從來十二

廢藩置縣　明治四年（一八七一）に行はれた行政上の大變革で、從來の封建制度はこれによつて全く止んだ。

神佛分離　古來の日本の神々は皆印度の佛菩薩の顯現であるといふのである。本地垂迹説に基づいて神佛を混淆してゐたが、明治初年に政府は、この習俗を禁止し神佛をそれぞれ分離した。

隨一　第一。

落札　入札によつてその物件が手に入ること。入札とは、賣買、請負等に關し、最も利益を多くの價格を申出たる者に契約する條件で、多人數の者に各自の見込みの價格を申し出させること。

萬圓乃至十六七萬圓であつたが、昭和四年度に二十五萬五千圓となり、翌五年度には約二十八萬圓に增額されたから、從來負擔力の少い爲、國庫よりの補助が自然後廻しになつてゐた破損の多い建造物を、割合に多く救ふ事が出來た。それでもなほ、重要な建造物で破損が甚だしく、危險に瀕してゐるのが多數あるから、適當の時期を誤らず修理をする爲には、どうしても、毎年少くとも六七十萬圓を要するので、更に一層の增額を必要としてゐるのである。

古代の建造物は、いづれもその時代々々の樣式を代表してゐる貴重な遺物であるが、明治維新の初には、廢藩置縣や神佛分離などの餘波を受けて、りつぱな建造物で惜氣もなく破壞されてしまつたものが少くない。今國寶の隨一に數へられてゐる奈良の興福寺の五重塔の如きは、嘗て賣卻される事となり、八十圓に落札されたが、落札者は、足場をかけて塔を取毀つのに意外の費

たゝり（祟）

用を要するので、燒いて金物を取らうとした。ところが、萬一火事を出されては迷惑であると、近隣から苦情が出て、彼此してゐるうちに、終に破壞を免れたやうなわけであつた。また昭和六年に指定された福山城の天守の如きは、天守中でも最も構造の發達した、材料の見事な優秀のものであるが、やはり明治五年に賣拂ふ事となつて、八十圓に落札された。しかし、これもまた興福寺の五重塔同樣、燒拂はうとしたが、昔から天守に主が棲んでゐて、指一本でも觸れるとたゝりを受けるといふ迷信があつたので、落札者も恐れて、終に入札を取消した。その後三四回入札させたが應募者がなく、結局そのまゝ公園に編入されて、保存される事となつたのは幸である。名古屋城の天守の金のしやちほこは、昔から有名なものであるが、明治の初年に、無用の長物として取除けられた事があつた程である。時勢とは言ひながら、これを今日古代の建造物を國寶に指定して、國家に於て大切に保護しようと

凌駕する　他を壓してその上に出る。しのぐ。

してゐるのに對照してみると、實に今昔の感に堪へない。

思ふに我が國の建築界は、古來朝鮮からも支那からも大なる影響を受けて發達したが、我々の祖先は決してその模倣に甘んぜず、忽ちこれを日本化して、彼等を凌駕するりつぱな樣式を建設したのである。それは、古來の國寶建造物を研究してみれば、明らかに證據立てられる。これ等の建築には、我々の祖先の嗜好や精神が一貫して織込まれてゐると共に、將來の新しい建築樣式の建設に向つて、大なる教訓を與へてゐる。

かくて我が國寶建造物は、建立以來幾多の災厄を免れて幸に今日に遺存し、我が國古來の文化の眞相を語り、且東洋建築を代表して、我が國體の精華を世界に示してゐるものであるから、國家に於ても、また一般國民に於ても、十分にこれを愛護し、その保存の爲に盡力しなければならないのは勿論である。

君　第九十六代後醍醐天皇。
源具行　權中納言。元弘二年（一九二年）北條氏の臣に殺された。
俊基　藤原氏。才學があつたが、元弘二年北條氏に害せられた。
資朝　藤原氏。
去年　正中二年。（一九八五年）
本間入道　本間宗忠。
怖しき島とこそ聞ゆれ

六　阿新丸　その一

さる程に、君の御企を申し勸めけるは、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝なり。各死罪に行はるべしと評定一途に定まつて、まづ去年より佐渡國へ流されておはする資朝卿を斬り奉るべしと、その國の守護本間山城入道に下知せらる。この事京都に聞えければ、この資朝の子息邦光の中納言、その頃は阿新殿とて、歳十三にておはしけるが、父の卿囚人になり給ひしより、仁和寺邊に隱れてをられけるが、父誅せられ給ふべき由を聞いて、「今は何事にか命を惜しむべき。父と共に斬られて冥途の旅の伴をもし、また最期の御有樣をも見奉るべし」とて、母に御暇をぞ乞はれける。

母御頻りに諫めて、「佐渡とやらんは人も通はぬ怖しき島とこそ聞ゆれ。日數を經る路なれば、いかんとしてか下るべき。その上、汝に

とめなば……ありぬべし

愚ひ遣るこそあはれなれ

敦賀の津　今、福井縣敦賀市。

この内への御用にて御立ち候かまたいかなる用にて候ぞ

さへ離れては、一日片時も命存ふべしとも覺えず」と、泣悲しみてとどめければ、「よしや伴なひ行く人なくば、いかなる淵瀨にも身を投げて死なん」と申しける間、母、いたくとめなば、また目の前に憂き別れもありぬべしと思ひわびて、力なく、今までたゞ一人附添ひたる中間を相添へて、はる〳〵佐渡國へぞ下されける。

路遠けれども乘るべき馬もなければ、履きも習はぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露分け分くる越路の旅、思ひ遣るこそあはれなれ。都を出でて十日餘りと申すに、越前の敦賀の津に著きにけり。これより商人船に乘りて、程なく佐渡國にぞ著きにける。人してかうと言ふべき便りもなければ、自ら本間が館に至つて、中門の前にぞ立ちたりける。をりふし僧のありけるが立出でて、「この内への御用にて御立ち候か。またいかなる用にて候ぞ」と問ひければ、阿新殿「これは日野中納言の一子にて候が、この頃斬られさせ給ふべしと承つて、

本間も岩木ならねばさすがあはれにや思ひけん

なか〳〵冥途の障となりぬべしいかゞあらんずらん

その最期のさまをも見候はん爲に、都よりはる〴〵と尋ね下りて候」と言ひもあへず、涙をはら〳〵と流しければ、この僧心ありける人にて、急ぎこの由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすがあはれにや思ひけん、やがてこの僧を以て持佛堂へ誘ひ入れて、踏皮、脛巾ぬがせ、足洗ひて、おろそかならぬ體にてぞ置きたりける。

阿新殿これを嬉しと思ふにつけても、「同じくは父の卿を疾く見奉らばや」と言ひけれども、今日明日斬らるべき人にこれを見せては、なか〳〵冥途の障ともなりぬべし。また關東への聞えもいかゞあらんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔てたる所に置きたれば、父の卿はこれを聞きて、行方も知らぬ都にいかゞあらんと思ひ遣るよりもなほ悲し。子はその方を見遣りて、浪路遙かに隔りし鄙の住居を思ひ遣つて、心苦しく思しつる涙は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。これこそ中納言のおはします牢の中よりとて

情なの本間が心や對面をだに許さず

あゝうたてしき事かな

今朝までは氣色しをれて常には涙を押拭ひ給ひけるが

見遣れば、竹の一むら茂りたる所に堀掘廻らし、塀塗つて、行通ふ人も稀なり。情なの本間が心や。父は禁牢せられ、子は未だ幼し。たとひ一所に置きたりとも、何程の怖れかあるべきに、對面をだに許さで、まだ同じ世の中ながら生を隔てたる如くにて、亡からん後の苦の下、思寢に見ん夢ならでは、相見ん事もありがたしと、互に悲しむ恩愛の父子の道こそあはれなれ。

五月二十九日の暮程に、資朝卿を牢より出し奉りて、遙かに御湯も召され候はぬに、御行水候へ」と申せば、はや斬らるべき時になりけりと思ひ給ひて、「あゝ、うたてしき事かな。我が最期のさまを見ん爲に、はる〴〵と尋ね下りたる幼き者を、一目も見ずして果てぬる事よ」とばかり宣ひて、その後は曾て諸事につけて言葉をも出し給はず。今朝までは氣色しをれて、常には涙を押拭ひ給ひけるが、人間の事に於ては、頭燃を拂ふ如くになりぬと悟つて、たゞ綿密の工夫

此所より十町ばかりある河原へ出し奉り

むくろ（軀）

今生の對面終にかなはずして變れる白骨を見る事よ

けなげ（健氣）

高野山　和歌山縣伊都郡。こゝに眞言宗古義派の總本山金剛峯寺がある。

の外は、餘念ありとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄せて乘せ奉り、此所より十町ばかりある河原へ出し奉り、輿かき据ゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直つて、辭世の頌を書き、筆をさしおき給へば、斬手後へ廻るとぞ見えし、御首は敷皮の上に落ちて、むくろはなほ坐せるが如し。この程常に法談なんどし給ひける僧來りて、葬禮形の如く取營み、空しき骨を拾ひて阿新に奉りければ、阿新これを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、「今生の對面終にかなはずして、變れる白骨を見る事よ。」と、泣悲しむもことわりなり。

七　阿新丸　その二

阿新未だ幼稚なれども、けなげなる所存ありければ、父の遺骨をばたゞ一人召使ひける中間に持たせて、「まづ我より先に高野山へ

これは……思ふ故なり

腹切らんずるものを

本間が運や強かりけん

これは若し本間入道が子息にてやあるらん

参りて、奥の院とかやに納めよ。」とて、都へ歸し上せ、我が身はいたはることある由にて、なほ本間が館にぞとゞまりける。これは本間が情なく父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故なり。

かくて四五日經ける程に、阿新晝は病の由にて終日に臥し、夜は忍びやかにぬけ出でて、本間が寢所なんどこまぐに窺うて、隙あらばかの入道父子が間に一人刺殺して、腹切らんずるものをと、思ひ定めてぞ狙ひける。

或夜雨風烈しく吹いて、宿直する郎等どもも皆遠侍に臥したりければ、今こそ待つところの幸よと思ひて、本間が寢所の方を忍びて窺ふに、本間が運や強かりけん、今夜は常の寢所を變へて、いづくにありとも見えず。また二間なる所にともしびの影の見えけるを、これは若し本間入道が子息にてやあるらん、それなりとも討ちて

よしやこれも時にとつては親の敵なり

ともしび殊に明らかなれば

あらんずらんと危みて

今はかうと嬉しくて

恨を散ぜんと、ぬけ入りてこれを見るに、それさへ此所にはなくして、中納言殿を斬り奉りし本間三郎といふ者ぞ、たゞ一人臥したりける。

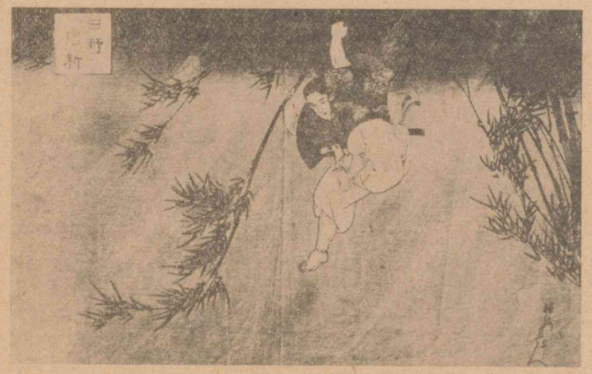
よしやこれも時にとつては親の敵なり、山城入道に劣るまじと思ひて、走りかゝらんとするに、我は元來太刀も刀も持たず、たゞ人の太刀を我がものと頼みたるに、ともしび殊に明らかなれば、立寄らば、やがて驚き合ふ事もやあらんずらんと危みて、左右なく寄り得ず。いかゞせんと案じ煩うて立ちたるに、をりふし夏なれば、ともしびの影を見て、蛾といふ蟲のあまた明障子に取附きたるを、すはや究竟の事こそあれと思ひて、障子を少し引きあけたれば、この蟲あまた内へ入りて、やがてともしびをうち消しぬ。

今はかうと嬉しくて、本間三郎が枕に立寄りて探るに、太刀も刀も枕にあつて、主はいたく寝入りたり。まづ刀を取つて腰にさし、太

寝たる者を殺すは死人を殺すに同じければ

番衆ども驚き騒ぎて火をともしてこれを見るに

刀を抜いて胸元にさし當てて、寝たる者を殺すは死人を殺すに同じければ、驚かさんと思ひて、まづ足にて枕をはたとぞ蹴たりける。蹴られて驚くところを、一の太刀に臍の上を疊までつと突通し、返す太刀に喉笛刺斬つて、心靜かに後の竹原の中にぞ隱れける。



阿新堀を越ゆ（橋本周延筆）

本間三郎が一の太刀に胸を通されてあつといふ聲に、番衆ども驚き騒ぎて、火をともしてこれを見るに、血の附きたる小さき足跡あり。「さては阿新殿のしわざなり。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出でじ。捜し出してうち殺せ」とて、手に〳〵松明をと

殘る所なくぞ搜しける

今はいづくへか遁るべき

父の素意をも達したらんこそ忠臣孝子の義にてもあらんずれ

さらばこれを橋にして渡らんよ

船に乘つてこそ陸へは著かめ

もし、木の下草の蔭まで殘る所なくぞ搜しける。

阿新は竹原の中に隱れながら、今はいづくへか遁るべき。人手にかゝらんよりは、自害をせばやと思はれけるが、憎しと思ふ親の敵をば討ちつ。今はいかにもして命を全うして、君の御用にも立ち、父の素意をも達したらんこそ忠臣、孝子の義にてもあらんずれ。若しやとひとまづ落ちて見ばやと思ひ返して、堀を飛越えんとしけるが、幅二丈、深さ一丈に餘りたる堀なれば、越ゆべきやうもなかりけり。さらばこれを橋にして渡らんよと思ひて、堀の上に末靡きたる呉竹の梢へさら〳〵と登りたれば、竹の末堀の向ふへ靡き伏して、やす〳〵と堀をば越えてけり。

夜は未だ深し、湊の方へ行きて、船に乘つてこそ陸へは著かめと思ひて、たどる〳〵浦の方へ行く程に、夜もはや次第に明離れて、忍ぶべき路もなければ、身を隱さんとて日を暮し、麻や蓬の生ひ茂りたる中に隱れゐたれば、追手どもと思しき者ども、百四五十騎馳散つて、「若し十二三ばかりなる兒や通りつる」と路に行會ふ人ごとに問ふ音してぞ過行きける。

麻や蓬の生ひ茂りたる中

これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ

阿新その日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと志して、そこともしらず行く程に、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をや廻らされけん、年老いたる山伏一人行會ひたり。この兒の有樣を見ていたはしくや思ひけん、「これはいづくよりいづくをさして御渡り候ぞ」と問ひければ、阿新事のやうをありのまゝにぞ語りける。山伏これを聞いて、我この人を助けずば、只今の程にかはゆき目を見るべしと思ひければ、御心安く思し召され候へ。湊に商人船ども多く候へば、乘せ奉りて、越後、越中の方まで送り附けまゐらすべし」と言ひて、足たゆめばこの兒を肩に乘せ背に負うて、程なく湊にぞ行著きける。

越後越中の方まで送り附けまゐらすべし

夜明けて、便船やあると尋ねけるに、をりふし湊の内に船一艘もなかりけり。いかゞせんと求むるところに、遙かの沖に乘りうかべたる大船、順風になりぬと悅びて、檣を立て、とまを捲く。山伏手を擧げて、「その船これへ寄せてたび給へ、便船申さん」と呼ばはりけれども、曾て耳にも聞入れず、船人聲を帆に上げて、湊の外へ漕出す。山伏大きに腹を立て、柿の衣の露を結んで肩にかけ、沖行く船に立向つて、いらたか珠數をさらさらと押揉みて『一持祕密咒、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵。』といへり。況や多年の勤行に於てをや。明王の本誓誤らずば、權現、金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、その船此方へ漕返してたばせ給へ。」と、跳り

夜明けて便船やあると尋ねけるに

とま（苫）

その船これへ寄せてたび給へ便船申さん

漕返してたばせ給へ

山伏船を呼ぶ　（伊勢寛一筆）

上り、跳り上り、肝膽を碎いてぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やし給ひけん、沖の方より俄に惡風吹來つて、この船忽ちに覆らんとしける間、船人どもあわてて、「山伏の御坊まづ我等を御助け候へ。」と、手を合せ膝を屈め、手に〳〵船を漕戻す。汀近くなりければ、船頭船より飛下りて、兒を肩に乘せ、山伏の手を引いて、屋形の内に入りたれば、風はまたもとの如くになほりて、船は湊を出でにけり。

その後、追手ども百四五十騎馳來り、遠淺に馬を控へて、「あの船とまれ。」と招けども、船人これを見ぬ由にて、順風に帆を上げたれば、船はその日の暮程に、越後の府にぞ著きにける。阿新山伏に助けられて、鰐の口の死を遁れしも、明王加護の御誓、いちじるしかりけるしるしなり。

（太平記）

漕返してたばせ給へ

風はまたもとの如くになほりて

越後の府　越後の國府。今の新潟縣中頸城郡直江津町の近くにあつた。

長塚節　歌人、小説家。茨城縣の人。大正四年歿、年三十七。

もみ（樅）

とーん〳〵と遙かに谷から響き渡つて聞える

尻きりの紺仕事著に脚絆をきりつと締めてゐる

八　炭燒の娘

長塚節

低いもみの木に藤の花が垂れてゐる所から徑をおりる。炭燒小屋がすぐ眞下に見える。狹い谷底いつぱいになつて見える。あたりは朗かである。とーん〳〵といふ音が遙かに谷から響き渡つて聞える。

谷底に著いて見ると、紐のちぎれさうな脚絆を穿いた若者が、竈の側でかしの大きな榾に楔を打込んで割つてゐるのであつた。お秋さんは背負子といふもので榾を背負つて、涸れた谷の窪みをおりて來た。拇指を肋の所で背負帶に挾んで、兩肘を張つて俯向きながら、そろ〳〵と歩く。榾は五尺程の長さである。横に背負つてゐるのだから、岩角へぶつつかりさうである。尻きりの紺の仕事著に脚絆をきりつと締めてゐる。さうして白い顏へ白い手拭を冠つた

お秋さんは荷をおろすと輕げに背負子を左の肩に引つかけて登る

せきれい（鶺鴒）

せきれいが……飛んで行く

のが際立つて目に立つ。積重ねた榾の上へ仰向けになつて、復起きたら、背負子だけが仰向けのまゝ榾の上に殘つた。お秋さんは荷をおろすと、輕げに背負子を左の肩に引つかけて登る。こちらをちよつと見て、すぐ伏目になつた。やつぱりそろ〳〵と歩いて行く。榾を運んでしまつたら、楔で割つたのを二本三本づつ、藤蔓の裂いたので括り始めた。兩端を括つて立て掛ける。餘つ程重さうである。これが卽ち炭木である。女の仕事には隨分思ひきつたものだと思つた。

小屋へ腰をかけてゐると、せきれいが時々蟲を銜へて足許まで來ては、尾を搖らしながらついと飛んで行く。谷底が狹いだけに空も狹く見える。狹い空は拭つたやうである。その蒼天へ向いてすつと延びたもみの木がある。根の生え際が小屋の屋根からではずつと上にあるので、尙更に延びて見える。梢で小鳥が啼き出した。美音である。何だと聞いたら、爺さんが瑠璃だと言つた。

清澄山。千葉縣安房郡。海拔三八三メートル。

あの雨の降る日などには、そこらの木まで猿が參ります

辨當をつかふ時、お秋さんがお茶を汲んで、山芋を一皿くれた。お秋さんは草鞋を取つただけで、脚絆のまゝ疊に膝をついてゐる。自分へ茶を出す爲わざ〳〵上つたのだ。何故だと言ふと、土瓶に二度目の湯をさしたら、すぐに草鞋をはいたからである。山芋はうまかつた。山芋の續きが猪に移つた。清澄には猪がゐる。猪は山芋が好きで、見附けたら鼻の先で掘つてしまふ。

「うつかりすると曲り角などで、鼻の先を眞黑にしたのに出つくはす事があります」。

と、これは爺さんの愛敬話である。

「あの雨の降る日などには、そこらの木まで猿が參ります」。

と、お秋さんが傍から言つた。お秋さんは滅多にものを言はぬ。

炭を出すところである。炭竈の口を突崩したら、焰がぱつと一時

烈々たる凄じい火である

もみの棒はこれへ乗せかけたので容易に差引がなる

に吹出した。自分は思はず後へ下つた。炭竈の中は眞赤なうちに黄色味をおびた烈々たる凄じい火である。もみの二間餘の棒の先に鈎の手を附けたのを以て、爺さんはそれを掻出さうとする。炭竈の前は眉毛も焦げるかと思ふ程熱い。こんな大きな棒が果して使へこなせるものかと怪しみながら見てゐると、天井から藤蔓で自在鈎のやうなものをさげた。もみの棒はこれへ乗せかけたので、差引が容易になる。案外な工夫である。これだから重い方が落著いて、扱ひいゝのだと笑ひながら、鈎の手を眞赤な炭に引掛ける。炭の折れる事があると、かちんと石のやうな響がする。もみの棒は見るうちに火が附いて、ぽつぽと燃える。燃

炭焼

炭は既に掻出されたる灰を始めてからは篩ひ始めたる炭の碎けを秋の掻出すを待ぐ

らつこ（獵虎）

えても構はずに掻出す。遂にはじうつと傍の流へ突つこんで、別に水に浸して置いた鈎の手で掻出す。少し掻出すと一つに寄せて、それに灰をかける。一遍出したら爺さんの顏も燒けたやうに眞赤になつた。何時でも脱いだ事のないらつこの帽子を取つて、たら〳〵と流れる汗を拭いてゐる。らつこの帽子は毛が七分通りも落ちてゐて、汗の爲に餘つ程堅くなつてゐるだらうと想像される。

お秋さんはどこからか青葉の附いた小枝をがさ〳〵といふ程掻つ切つて來た。炭は既に灰から掻出されてあつたが、お秋さんはすぐ炭の碎けを篩ひ始めた。乾燥しきつた灰は容赦もなく白い手拭にあびせかゝる。炭を俵へ詰める手傳にかゝる。青葉の附いた小枝はぐるつと丸めて、俵の底へ當てるのであつた。

お秋さんはこんなに忙しく仕事をしてゐたと思つたら、ふと見えなくなつた。自分は谷が急に寂しくなつたやうに感じた。

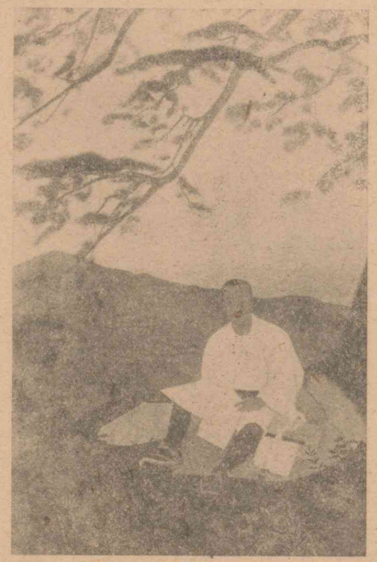
私と一緒では暇がとれて迷惑でございませう

其所には刺がびつしり生えて

自分が暇を告げて出たら、お秋さんは背負子を負うて坂の中途まで行つてゐた。自分は忽ちに追附いた。さうして、お秋さんはどこまで行くのか知らんが、歩かれるだけ一緒に歩くつもりで、なるべく靜かに足を運んだ。お秋さんは、

「私と一緒では暇がとれて迷惑でございませう」。

と、言つて頻りに急ぐ。身一つでも容易でないのに、よくも足が續くものだと思つた。



歌旅の曼殊沙華（高橋榮峰）

「此所に鹿が立つてゐた事があります」。

と、杉の木の下で言つた。其所には刺がびつしり生えて、白い花の咲

しやが（胡蝶花）

いた極めて小さな木があつた。眞赤な枸杞の實のやうなのがたつた一つ落殘つてゐる。珍しいから一枝折つたら、

「ありどほしの花でございます」

と、お秋さんがまた言つた。坂を登りきつたら、さすがに息苦しさうに、しやがの花の疎らな草の中に荷をおろした。背負子を負ふ爲に殊更小さな綿入のちやん〳〵を引つかけたので、身體が何時もより小がらに見えた。手拭を取つたら、顏が赤らんで、生え際には汗がにじんでゐた。

「あれ、こんな所に藤の花が……」

と、もみの木を見て、お秋さんが言つた。藤は散つたのもあつて、房はもう延びきつてゐる。

小さな山々が限りもなくうね〳〵と連なつてゐる。格別の高低もない。峯から峯へ一つ〳〵飛越して見たいと思ふ程一帶に見え

ぽちつと白い物が見え出した

なほ……視詰めてゐる

る。渺茫たる海洋は夏霞が淡くたなびいたといふ程ではないが、いくらかどんよりとして、たゞ一抹である。じつと見てゐると、どこからか胡粉を落したといふやうに、ぽちつと白い物が見え出した。漁舟である。二つも三つも見え出した。白帆はもとから其所にあつたのだ。

なほじつと視詰めてゐると、ぽちつと白いのがだん〳〵自分へ遏つて來るやうに思はれる。遠くはすべてがぼんやりである。谷の梢や、もみの木や、しやがの花や、近い物は近いだけ鮮かである。さうして最も近いのはお秋さんである。

お秋さんは背負子を岩の上に乘せて、くるりと背中を向けて背負つた。

（炭燒の娘）

高島平三郎　心理學者、教育家。東洋大學教授、立正高等女學校長。慶應元年（二五二年）備後（廣島縣）に生れた。

九　生活に伴なふ婦人の自覺

高島平三郎

若い女性が現代思想の影響を受けて、物質に重きを置き、生活を考慮するやうになつたのは、多くの餘弊を伴なふ點に於ては憂ふべきであるが、一面、婦人の獨立自覺を促す一大衝動となつた事を見逃してはならない。

婦人が從來のやうに一に夫によつて生活し、いはゆる夫を天と仰いでこれに仕へ、生活の安定を夫に保證してもらふといふ卑屈な考でなく、たとひ結婚後生活に困らないでも、何等かの職業的知識を得て、社會の爲、國家の爲にこれを應用しようといふ高尚な考をもつやうになつて來たのも、生活といふ事を眞面目に考へる自覺から起つたのである。

何等かの職業的知識を得て社會の爲、國家の爲にこれを應用しようを

今日多くの職業婦人を生ずるやうになつたのは、いはゆる生活

現時我が國に職業婦人を輕蔑する風の漸次失はれつゝあるのは、まことに慶すべきことである

革命の結果、必要に迫られて起つた現象ではあらうが、しかも多くの婦人のうちには、眞の自覺からして、萬一の場合の爲、或は純粹の興味の爲、或は社會に寄與する爲に、或職業に從事する者も少くない。現時我が國に職業婦人を輕蔑する風の漸次失はれつゝあるのは、まことに慶すべき事である。

現代に於て、女性が孔雀のやうに著飾り、何事も爲さず、夫の保護の下に生活してゐるのは、實に時代錯誤である。現代人は須く自己の力で自己の運命を開拓して、社會に寄與する事を以て務とせねばならぬ。由來東洋に於ては、一般に勞働を賤しむ習慣がある。嘗て印度の或國王が、英本國の貴族に招かれた時、その國の貴族等が汗を流してテニスやクロッケをして遊んでゐるさまを見て、「あの人たちは貴族でありながら、何故にあのやうな事を自分でするのだらう。あゝした汗の出る仕事は家來にさせるがよい」と言つたさうで

じつとおとなしくしてゐるのが上品と見られ

たとひ……あつたにもせよ

ある。運動は勿論勞働ではないが、要するに、汗を出すやうな事は賤しい仕事で、貴族のする事ではないといふ觀念が、東洋人の頭には昔から深く浸潤してゐるのである。まして婦人は、深窓のうちに美しく著飾り、何事も爲さず、じつとおとなしくしてゐるのが上品と見られ、一般にさういふ境遇を望んでゐた。勿論今日でもかういふ境遇を最高の幸福のやうに喜んでゐる人もあらうが、自覺のある婦人は決してかやうな事を理想とせず、勞働を恥づかしいと思はぬやうになつた。これは實に喜ぶべき傾向である。我が國に於て、一部婦人の間に唱へられた生活改善の聲が、たとひ男子の協力があつたにもせよ、漸次一般女性の間に強く廣く深く響かうとしてゐるのも、時代思想の生んだ寧馨兒の一である。

要するに、我が國の女性、特に若い女性に最も大切な事は、眞に自己の生活に目覺めて、一方に物質生活の眞價を認め、餘りに高くこれを評價せぬと同時に、正當にこれを尊重し、奢侈贅澤を戒めて、その消費を有效ならしめる事である。女性によつて生産される富も少くないが、女性によつて消費される富はそれよりも遙かに多い。それ故、女性は生産と同時に、否、生産の前にまづ富の節約に就いて十分な科學的知識をもつて、いはゆる消費經濟に注意する事が必要である。但し、こゝに言ふ富とは、一切の物質を指し、我々の生活に必須なすべてのものを包含するので、單に金錢のみに限るわけではないのである。

（女心と世の中）

島崎藤村詩人、小說家。名は春樹。明治五年長野縣に生れた。

一〇　短夜の頃

島崎藤村

毎日よく降つた。もはや梅雨明けの季節が來てゐる。町を呼んで通る竿竹賣の聲がするのも、この季節にふさはしい。そらまめ賣の來る頃は既に過去り、青梅を賣りに來るにもやゝ遲く、涼しい朝顏

そらまめ（蠶豆）

今は青い唐辛の荷を擔いだ男が來始める頃だ

蚊帳の内に螢を放して遊ぶ事を知つてゐた昔の俳人などは、確かに蚊帳黨の一人であつたらう。それ程の物數寄な心は持たないまでも、寢冷えする心配も割合に少い所に足を延して、思ふさま長くなつた氣持は何とも言はれない。枕に近く髮に屆く蚊帳の感觸も身にしみる心地がする。蚊帳は内から見たばかりでなく、外から

賣の呼聲を聞きつけるにはまだ少し早くて、今は青い唐辛の荷を擔いだ男が來始める頃だ。住めば都とやら言ふが、私には寧ろ住めば田舍といふ氣がして來る。實際、この界隈に見附けるものは都會の中の田舍であるが、でもさすがに町の中らしく、朝晩に呼んで來る物賣の聲は絶えない。

どれ、そろ〳〵蚊帳でも取出さうか。せい〳〵一月か一月半くらゐしかその必要もないこの町中では、蚊帳を釣るのは寧ろ樂しみなくらゐである。

蚊帳の内に螢を放して遊ぶ事を知つてゐた昔の俳人などは、確かに蚊帳黨の一人であつたらう。それ程の物數寄な心は持たないまでも、寢冷えする心配も割合に少い所に足を延して、思ふさま長くなつた氣持は何とも言はれない。枕に近く髮に屆く蚊帳の感觸も身にしみる心地がする。蚊帳は内から見たばかりでなく、外から

見た感じもよい。内にまぎれこんだ蚊を燒くといつて、あちこちと持廻る蠟燭の火を青い蚊帳越しに外から眺めるなども、夏の夜でなければ見られない趣だ。

古くても好いものは簾だ。よく保存された古い簾には新しいものにない味がある。簾は二重にかけて見ても面白い。一つの簾を通して、他の簾に映る物の象を透かして見る時など、殊に深い感じがする。

團扇ばかりは新しいものに限る。この節の東京の團扇は粗製に流れて來たかして、一夏の間の使用にすら耐へないのがある。圓い竹の柄で、全部の骨が一つの竹から分れて行つてゐるやうな丈夫なものは餘り見當らなくなつた扇子にもまして、もつと一時的で、移り行く人の嗜好や世相の奥までも語つて見せてゐるものは團扇だらうか。形も好ましく、見た眼も涼しく、好い風の來るのを選び

形も好ましく見た眼も涼しく好い風の來るのを選び當てた時は嬉しい

蚊帳、簾、團扇、素足、それから、などと順序もなくこゝに書いて來た

當てた時は嬉しい。それを中元のしるしにと言つて、訪ねて來る客などからもらひ受けた時も嬉しい。

この節の素足の心地よさ。尤も、袷から單衣になり、シャツから晒木綿の襦袢になり、だん〳〵いろ〳〵なものを脱いだ後で、私たちはこの節の素足にまでたどり著く。私は人間の身體の中で一番足が眼につくと言つた足袋屋のある事を知つてゐる。それ程職業的な意味からでなく見ても、足の持つ性格の多種多樣なのには驚かされる。素足の表情程、また夏の夜の生氣をよく發揮するものはあるまい。

蚊帳、簾、團扇、それから素足などと順序もなくこゝに書いて來た。自分の好きな飲料や食物の事なども少し書添へよう。

茶にも季節はある。一番よくそれを感ずるのは新茶の頃である。ところが、新茶くらゐ香氣がよくて、またそれの早く失はれ易いも

新茶と古茶との區別がなくなつて來るのも面白いる

のも少いかと思ふ。三度ばかりも湯をつぐうちに、吸子の中の嫩葉がすつかりその持味を失つてゐる事は、茶好きな者のよく經驗するところである。新茶の頃が來ると、私はそれに古茶をまぜて飲むのを樂しみにしてゐる。

六月を迎へ、七月を迎へするうちに、新茶と古茶の區別がなくなつて來るのも面白い。

新茶で思ひ出す。靜岡の方に住む人で、毎年きまつて新茶を贈つてくれる未知の友がある。一年たゞ一回の消息があつて、それが新茶と一緒に屆く。あんなに昔を忘れない人も珍しい。私の方でも新茶の季節になると、もうそろ〳〵靜岡から便りのある頃かなどと思ひ出して、それを心待ちにするやうになつた。

簡單な食事でも滿足してゐる私たちの家では、たまに手造りの柳川などが食卓に上るのを馳走の時とする。どぢようは夏のもの

どぢよう（泥鰌）

じゆんさい（蓴菜）
いんげん（隱元）
それで茄子を新しい漬けるのも夏の事一つ樂しみだ

だが、私はあれを好む。年をとるにつれて殊にさうなつた。

じゆんさい、青いいんげん、瓜、茄子、すべて野菜の類に嫌ひな物はないが、この節盛んに出る物はその姿まで涼しくて好ましい。

冬の頃から、私の家では到來物の酒の粕を壺に入れ、堅く目張りをして貯へてゐるが、それで新しい茄子を漬ける事も、夏の樂しみの一つだ。

この短夜の頃が私の心をひくのは、一つは黄昏時の長いにもよる。あの一年のうちの半分が晝で、半分はまた夜であるやうな北の國の果を想像しないまでも、黄昏と夜明けのかなり接近して、午後の七時半過ぎにならなければ暗くならない夜が、朝の三時半過ぎか四時近くには明放れて行くと考へる事は樂しい。また私たちが眠からさめないで、半分夢を見てゐる間に、そこいらはもう明るくなつてゐると考へる事も樂しい。

夏の夜は云々　山家集、西行法師の作。

あれを見ると眞に眼のさめるやうな心地がする

夏の夜は篠の小竹のふしちかみ
そよやほどなく明くるなりけり

短夜の頃の深さ、空しさは、こゝに盡すべくもない。そこにはまた私の好きな淡い夏の月も待つてゐる。夏の月の好い事は、それが餘りに輝き過ぎない事だ。

露にぬれた芭蕉の葉から、涼しい朝の雫の滴り落ちるやうな時もやつて來た。あの雫も、この頃の季節の感じを特別なものにする。あれを見ると、眞に眼のさめるやうな心地がする。長い梅雨の續いた時分には、私はよく庭の芭蕉の見える所に行つて、あの嫩い、夢でも湛へたやうな、灰色がかつた青い卷葉が開いて行くさまなどをじつと眺めながら、多くの時を送つた事もあつた。

小泉八雲
文學者。元英國人。初名ラフカヂオ・ハーン。明治三十七年（一九〇四年）歿。年五十五。
松江島根縣松江市。

それから禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空を撼がせる

一一　神國の首都

小泉八雲

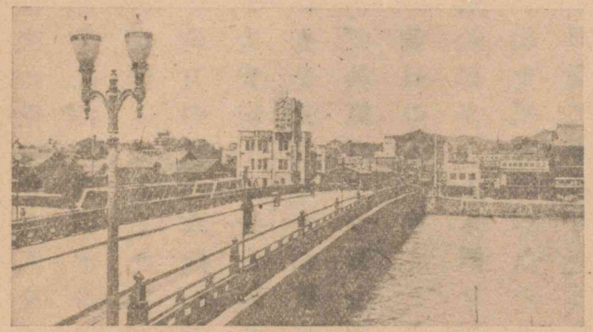
松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底で緩やかな大きな脈が搏つやうに響いて來る米搗の音である。杵の落ちる響が一定の拍子で洩れて來るのが、日本人の日常生活に伴なふあらゆる音響の中で、最もあはれに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏である。

それから禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空を撼がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から、太鼓の淋しげな音が、晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲「大根やい。蕪菁や蕪菁」「薪や薪」

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の底から伸びた春の若葉の軟かな綠の雲越しに、朝景色を眺め遣つ

對岸の日本の家屋は、恰も箱を閉ぢたやうである

た。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わなゝくやうに萬象を映寫して、微かに光つてゐる。この川は宍道湖へ向つて口を開け、湖は右手へ擴つて、杳乎たる連丘に包まれてゐる。對岸の日本の家屋は戸がみな閉つてゐるので、恰も箱を閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲狀をなした長い帶は、日本の昔の繪で見る通りであるが、實際の現象を眺めた事のない者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれないに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峯から峯へ、はて知らぬ長さの



大橋

だから湖水は實際より遙かに大きく……美しい幻の海となつて見える

朝日の方へ向くと……帆を揚げんとしてゐる

紗のやうに、横に延びてゐる。だから湖水は實際より遙かに大きく、昧爽の空の色と入交つた美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢のやうな一帶の丘陵は、はてしのない土手道かと怪しまれる。そして霧が立つにつれて、その趣は徐に變つて行く。朝日の黄色な緣が見えて來ると、今までのよりは更に強い、細やかな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水の彼方にある高い建物の木地の色が、美しい靄の色で蒸氣の立つ黄金色へと變る。

朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が、今しも帆を揚げんとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。まさにこれ蓬萊の夢である。霞にぼやけた船の精靈である。しかし、この精靈は雲と同樣、光線を受けて薄青い光の中で、金色に震へてゐる。

これは……潔齋である

輕い優美なそして新月のやうに彎曲した小舟

庭先の川端から、手を拍つ音が起つて來る、一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えないが、對岸の埠頭の石段をおりる男や女の姿は見える。めい〳〵帶に小さい手拭を挿んでゐて、顏と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に、必ず行ふ潔齋である。それから顏を朝日へ向け、四度手を拍つて拜む。長い橋の上からも、他の拍手の音が反響の如くに出て來る。遠くにある、輕い優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出て來る。この頗る異樣な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が增して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今皆朝日——お日樣——天照大神を拜んでゐるからである。いとも貴き日の造り主よ。この心地よき日光を賜ひて、世界を麗しくなし給ふ事を謝し奉る。言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人々の衷心である。朝日へ向つて

杵築の大社　出雲大社の古稱。官幣大社。大社町にある。

一畑山　松江市の東北方。

藥師如來　一畑藥師。簸川郡東村字小境の一畑寺にある。古來祕佛といはれ眼病の守護佛として有名。

しかし日本で最古のこの國ではまた佛敎徒も神道信者であるから

だけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大社へ向つてもさうするのである。顏を東西南北へ向けて、群神の名を低聲で唱へる者さへ隨分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山の高峯を眺めて、盲人の眼を開き給ふ藥師如來の大伽藍のある所へ向ひ、今度は佛敎の儀式に隨ひ、掌を合せて、輕く擦る者もある。しかし日本で最古のこの國では、佛敎徒もまた神道信者であるから、誰も〳〵古風な神道の祈の文句を唱へる「拂ひ給へ、淨め給へ、とほ神ゐみため」。

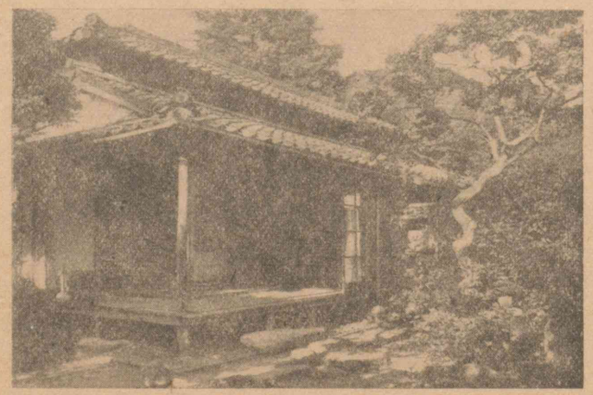
小泉八雲

手を拍つ音がやんで、一日の仕事が始り出し、橋の上にはからころといふ下駄の音が、だん〳〵高く響いて來る。大橋の上で鳴る下駄の音は、忘れられない音である。速くて、陽氣で、音樂的で、盛んな舞

速くて陽氣で音樂的で盛んな舞踏のやうな音である

慣れぬ者には困難であるのに

踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれぬ人の足がちら〳〵するのは、驚くべき光景である。その足は皆細くて、恰好が均整を得てゐて、ギリシャの古甕に描いた人物の足のやうに輕やかで、そして足を運ぶ時、指を先におろす。實際下駄では外にしやうがない。それは踵は下駄にも著かねば、地にも著かないし、足は楔形の木の臺を前へ傾けては進むのであつた。一足の下駄の上に立つだけでも、慣れぬ者には困難であるのに、日本の子供は三寸もある臺の下駄をはいて、親指と他の四



小泉八雲舊宅

更に珍しいのは……光景である

やがて學校へ急ぐ子供たちが出て來る

本の指に挾んだ前緒だけで足を固定させて、全速力を出して駈けて行く。それでも躓きもせず、また下駄もぬげない。更に珍しいのは、大人が木履で歩く光景である。これは木の臺に高さ五寸もある齒が附いて、全體の構造は、木製の長椅子の漆塗の標本かと思はれる。しかしそれをはいた人は、まるで足に何もつけてゐないかのやうに、樂々と闊歩する。

やがて學校へ急ぐ子供たちが出て來る。彼等の駈ける時に、綺麗な飛白の著物の闊い袖が波動すると、大きい蝶が羽搏をするやうに見える。

親船は白色や黄色の大きい翼を擴げるし、埠頭の側で眠つてゐた小蒸氣船は、煙突から煙を吐き始める。

（まだ馴れぬ日本の瞥見）

天際に聳立する富士ケ嶺を見てもまた清い流に臨んでも

神と上とが同義語である

一二　美しい自然と國民性

我が日本ほど美しい自然をもつてゐる國はない。これは世界に有名な事實である。しかし日本人は、それをたゞ美しいと見て賞するのみでなく、敬虔の心を以てそれに對する。淺綠色に澄渡つた大空を仰いでも、天際に聳立する富士ケ嶺を見ても、また清い流に臨んでも、その美しさの上にある偉大性、崇高性、清淨性を認めて、これを神聖なものとして崇敬する。そこに日本人の「神」の觀念の根源がある。我が國で「神」と「上」とが同義語である理由も、またそこから發してゐる。

神はどこの國にもある。そしてそれ等の神廟または教會には、常に參拜者が跡を絶たないが、その神前に捧げられる祈は、皆個人的な幸福の永續を希ふにあつて、日本のやうに國家的、國民的ではな

日本人の中にも……者があるが

多くは……氏族の祖先神であるか或は……自然神である

い。

日本人の中にも、稀には病氣の平癒や、一家の富貴を祈り求める者があるが、そんな迷信じみた事は、神に對する正しい態度ではない。我々日本人が神前に拜禮する心持には、もつと高い意義が存在してゐる。卽ち、國民生活の平安に對する祈求と、これに應ずる神人の恩德に向つての感謝とが主調となつてゐる。

現在我が國各地の神社に祭祀されてゐる神々を調べてみると、多くは曾てその地に住んでゐた氏族の祖先神であるか、或はそれ等の祖先たちが齋き祀つた自然神である。それで外國の學者などは、日本人の神社崇敬は一種の祖先崇拜敎であると評するのであるが、それは我が日本國民性の實相を知らない者の評語である。單純な祖先崇拜は、決して我が國の特色ではなく、隣國の支那には勿論、臺灣の蕃社にも、遠く離れては古代ローマなどにもあつて、一般

きりながら……それ等祖先神の守護は……他の人々には及ばない

これは……神社崇敬の一特色である

に祖先の靈は、その子孫の一身を守護すると信ぜられ、これに對して崇敬が捧げられてゐる。さりながら、それ等祖先神の守護は、同家の子孫に與へられるのみで、他の人々には及ばない。これは支那及び西洋諸國の國民性が、概ね個人主義に基づいてゐる事から來る結果である。我が國の神社崇敬も、祖先崇拜を基調として成立してゐるが、その神の恩寵は一人一家にとゞまらずして、大にしては國家を護り、小にしては一地方の平安を守るのである。故に元來は一氏族の神であつても、これに對して祈を捧げる者は、一氏族限りの繁榮、または個人の幸福のみを求めないで、汎く全同胞の爲に、國家の平和、社會生活の安全幸福を希ふのである。これは日本の國民性から來る神社崇敬の一特色である。故に元來は一氏族の爲に建てられた神社でも、これを國家の宗祀として、國家がその管理に當つてゐると同時に、國家の宗家たる皇室の御祖神を奉祀した神宮に

君臣一家の我が日本のみに見られる事實であつて

しかもかくの如き特色は後更に發達して

談山神社奈良縣磯城郡多武峯村多武峯。別格官幣社。

も、庶民の參拜をお許しになつてある。これは君臣一家の我が日本にのみ見られる事實であつて、他の國では、王家の祖神は決して人民を守護せず、人民もまた、これに對して崇敬を捧げないのである。かくの如くにして我が日本では、各氏族それ〴〵祖神を異にしてゐても、結局は全日本を一家族とする大團體の祖神の大旨に一致し、その大神の神意は、神統を承けさせられた萬世一系の天皇が奉體あそばして、國家最高の理想を實現あらせられ、臣下の重立つた者が、更に帝意を承け奉つて、中央に、或は地方にこれを執行するものと信ぜられた。そこで古來我が國人は、人身を具へさせ給ふ現在の神の意味で、天皇を現人神卽ち「あらひと神」と仰ぎ奉り、その聖旨を體し奉つて、實際政治を行ふ長官をも、やがてカミと稱してこれを尊敬した。しかもかくの如き特色は後更に發達して、國家に功勳ある大人物を神として祀るに至つてゐる。藤原鎌足を祀つた談山

太宰府神社福岡縣筑紫郡太宰府町。官幣中社。

湊川神社神戸市湊區多聞通。別格官幣社。

豐國神社京都市東山區。別格官幣社。

國民に對する寄與の爲である

神社、菅原道眞を祀つた北野神社や太宰府神社、楠木正成を祭神とする湊川神社、豐臣秀吉を祭神とする豐國神社などは、その著しい例である。神を人間から引離して特別高いところに仰ぎ馴れてゐる外國人は、人間を神として祀る日本人の風習を頗る怪しんでゐるが、これも日本の神の本性を知らないからである。道眞とか正成とかの大人物は、決して一個の人間として祀られてゐるのではなく、それが神として尊崇されてゐるのは、國家に對する功勳、國民に對する寄與の爲である。卽ち國民文化を高めて、これを人類の最高理想に導き、或は國民理想の達成を妨害せんとする暴力を排除して、國家の平安を擁護した偉大な働に日本人は神性を認めて、これに崇敬を捧げてゐるのである。この意味から言つて、日本歷史上の偉人英雄は、いづれも護國の神として祀られて然るべきであるのみならず、直接間接に文化の發達擁護に力を致した一般國民の祖

靖國神社　東京市麹町區九段三丁目。別格官幣社。

現に自然崇拜の行はれてゐる。

一種の行はれてゐる。

ところが我が國では、これ等の神はこれ等の信ぜられてゐる。

先もまた、神でなければならぬ。明治維新の際の殉國者をはじめ、西南役の戰死者、數度の對外戰役の戰死者等の靈を靖國神社に合祀せしめられた聖旨も、そこに存するのである。我々がかゝる神社の前に拜禮を捧げ、神の心を我が身に體して、國家の爲、國民の爲に努力すべきは當然の事であらう。

神社の祭神の中にはまた多くの自然神がある。例へば、山の神、河の神、海の神、風の神、雨の神等の類である。これも單に日本に限られた事ではなく、南洋あたりの土民の間に於ても、現に一種の自然崇拜が行はれてゐるし、名山、大川を祀るとか、風伯、雨師を郊祀したとかいふ類の記事は、支那の古書に甚だ數多く掲げられてゐる。しかし、それ等の自然崇拜は、多く自然力に對する恐怖感に原因して、ただ恐しい神としてこれを畏敬し、なるべくその被害を少くしてもらはんが爲に祈を捧げるに過ぎない。ところが我が國では、これ等

隨つて日本人は黒ずんだ濁つた水の中には神を考へてゐない。

の神は寧ろ人類生活を擁護し、その幸福を助長する神として信ぜられてゐる。我が日本は古來農業國であつた關係上、農作物の開花時や結實時に於ける風水害、または旱害は、國民生活を脅すものとして頗る怖れられたが、風神、雨神は勿論、山川湖海の神々は互に相戒めて、かゝる被害から農民たちを防護するにとゞまらず、進んで適當の風雨を與へて、作の豐饒を助成するものと一般に考へられた。卽ちこゝにも、日本の神は護國神の特性を發揮されてゐるのである。故に日本の自然神は常に感謝の對象であつて、一つとして恐しい神はない。隨つて日本人は、黒ずんだ濁つた水の中には神を考へてゐない。各地の傳說を見ても、物凄い恐しいやうな淵には、「ぬし」が棲んでゐると言傳へて、魔の淵と名附け、これを魔所としてゐる。泥沼のやうな所でもさうである。また山に就いて見ても、恐怖感を起させるやうな山は、魔の棲む山であつて、神在す山ではない。現に

今日でも地方へ行くと、古く山神を祀つたと傳へられる小祠や、水神の森と呼ばれてゐる所を見受けるが、それ等はいづれも比較的景色の明るい場所にあつて、祠前には清らかな水が流れてゐる。萬葉集その他の古歌に、神山として詠まれてゐる山々を調べてみても、駿河の富士山、越中の立山等、悉く山容のなだらかに美しい、またうち向つて見まほしい山ばかりである。これ等を考へても分る通り、日本人は單に山、または水に神を認めてゐるのではなく、特に美しい明るい山に神を認め、また水の清さに神を認めてゐるのである。これは清明心、卽ち清く明るい心を尊重する日本人の國民性から來る自然の結果である。

かくの如く我が國では、神も人も朗かな明るさに生きて一つ心に國家の平和、民人全體の幸福安寧を圖るのが民族の特色である。故に各地の神社は、古來國家の宗祀であると共に、また國民の爲の

立山　日本北アルプスの北西端に連なる。主峯雄山は海拔三〇一〇メートル。

山容のなだらかに美しいまたうち向つて見まほしい山ばかりである

神も人も朗かな明るさに生きて

殿堂であつて、祭禮その他一町一村の大切な式典は勿論の事、一族一家の私事でも、成年式とか結婚式とかいふやうな社會性を帶びた儀禮を行ふ時には、村人たちが必ず神前に出て、神にその事を奉告し、神人一致の精神を現したものである。我々の父母がさうしたやうに、祖父母も、曾祖父母もさうして、國家の爲に、地方の平和の爲に神と協力して、今日の日本を築き上げて來たのである。我々はどこまでもこの祖先の魂の籠つてゐる神の社を守り續けて、神と共に萬民共榮の實を擧げねばならぬ。

村人たちが必ず出て神前にて神に事の報告をなす

延喜時代　醍醐天皇の御代。（一五六一―一五八二年）

自修文

みやびの心

延喜時代の歌人凡河内躬恒は、

てる月を弓張としもいふことは
山べをさしていればなりけり

天皇の云々　第六十代醍醐天皇。

平忠盛　平氏の武將。清盛の父。（仁平三年（一一五三年）歿、年八十八。）

源三位頼政　源氏の横暴を惡み治承四年（一一八〇年）以仁王を奉じて平氏討滅の兵を起したが、敗れて宇治に自殺した、年七十七。

一條天皇　第六十六代。

實方卿　藤原實方。平安時代中期の廷臣。和歌を善くす。左近衛中將に至る。行成がその和歌を愛したので、怒つてその冠を打落したので、陸奥守に貶せられ、長德四年（一一六八年）地で歿した。

行成卿　藤原行成。平安時代中期の廷臣。書家。萬壽四年（一一六八七年）歿、年五十六。

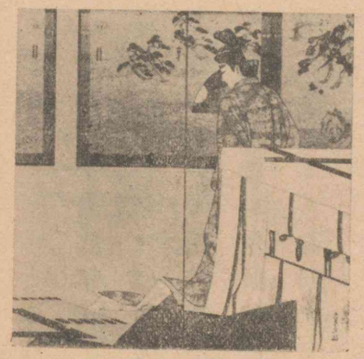
高倉天皇　第八十代。

白樂天　白居易。支那唐代の詩人。大中元年（西紀八四七年）歿、年七十五。

天平十八年　第四十五代聖武天皇の御代。一四〇六年。

橘諸兄　奈良朝初期の廷臣。天平寶字元年（一四一七年）歿、年七十四。

上皇の御宮　元正天皇の御宮。



行成卿（萩生天泉筆）

の歌に天皇の感賞を得た。武人で歌人であつた平忠盛の、

ありあけの月も明石の浦風に
　波ばかりこそよると見えしか

同じく武士で和歌の名手と稱へられた源三位頼政の、

郭公名をも雲ゐにあぐるかな
　ゆみ張月のいるにまかせて

いづれも、時にとつての面目を雲居の空に施したのである。

一條天皇の御代に、中將實方卿が一時の感情に激して、藤原行成卿の冠を打落したが、行成は少しも騒がず、笏を取出して冠を直した。天皇は御簾の隙からこれを御覽になつて、「行成は心優なる者である。實方は陸奥の歌枕見て參れ」とて陸奥へ遣されたといふ。歌枕見て參れ」との仰、何といふ優しい御言葉であらう。高倉天皇の御代に、衛士が御苑の紅葉を焚いて、酒を酌交した。天皇は「林間酒を煖めて紅葉を焚く」と白樂天の句を誦して、「風流な者よ」と仰せられた。何といふ寛弘の御德であらう。

行成卿（萩生天泉筆）

天平十八年正月、雪の降積つた朝、橘諸兄以下が上皇の御宮へ參つた時、各歌を作れとの仰、思ひ〳〵の作があつた中に、橘左大臣諸兄は、

降る雪のしろ髮までに大君に
　つかへまつれば貴くもあるか

と歌つた。白髮の老臣が君恩を喜んだ有樣が目に見えるやうで、君臣和樂の親しみが思ひ遣られる。

南殿の花の宴をはじめとして、雪の旦、月の夕べ、天皇が群臣を

宇多天皇　第五十九代。

後醍醐天皇　第九十六代。

韻致　おもむき。趣味。

召して詩歌管絃の風流を盡させられた事は、中古時代の常であつた。九月十三夜の後の月を賞する事は、宇多天皇の御代から始まつたとか。まして南殿の花の宴、をり〳〵の舞樂の華やかさ、きらゝかさは想像するに餘りある。後醍醐天皇が吉野山に雲居櫻を御覽じて、

こゝにても雲居の櫻咲きにけり
たゞかりそめの宿とおもふに

と仰せられた御雅懷は、聞く我等には悲憤の涙も添ふ心地がする。歴代の天皇が風雅韻致に富ませられ、殊に和歌に堪能でいらせられた事は、世界各國の帝室に例のない事であらう。

和歌は我が國固有の文學で、上下幾千載の文學を縱に貫き、横に貫いてゐるものである。漢文を主とし、漢詩を作る事の大いに行はれた時代でも、和歌は固有の文學として常に行はれた。延喜時代に初めて古今集の勅撰があつてから、續いて後撰、拾遺と鎌

八代集　古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今の八勅撰集。

院宣　上皇または法皇の宣旨。

志賀の都　志賀大津宮。天智天皇の皇居。その舊址は滋賀縣滋賀郡滋賀村にある。

倉の初頃までに八代勅撰集が院宣、或は勅命によつて出來上つた。承久の役の後鳥羽、順德、土御門の三上皇は殊にこの道に堪能でいらせられた。敷島の道といふ名稱もこの頃から起つた。和歌を日本固有の道と稱へたのである。勅撰集の撰集があつた事は、朝廷と和歌に少からぬ關係を有せしめた。一首でも勅撰集に採られる事を非常な名譽と感じた。もと〳〵古來の忠君心から出たのではあるが、撰集に入つて歌名を後世に傳へる事は、武人が戰場の功名よりも一層な名譽であつた。平家の都落の際、平忠度が途中から引返して、夜、千載集の撰者であつた俊成卿の門を叩いて、その歌集を託し、死後一首にても入選の榮を得しめ給へと賴んだのは有名な話である。俊成がその心を酌んで、よみ人知らずとして千載集に收めたのは、

さゝ波や志賀の都はあれにしを
むかしながらの山ざくら花

思念　おもふ。考へる。

鼓吹　さかんにおこしたてること。

吐露　自分の意見をのべあらはす。

の歌であつた。敕撰集は二十一代までを數へて、その後は絶えたが、天皇をはじめ奉り、攝關以下公家の人々は代々皆和歌の嗜があつた。皇室と和歌、實に離るべからざる聯想がある。萬世一系の皇統、太古以來の文學、列聖の御歌、和歌に伴なふ歴代の佳話、これ等は皆我が國の古代を思念せしめるものである。百人一首の歌がるたが永く廣く國民の間に喜ばれるのも、こゝにその意義がある。

一たび古代の語に綴られた三十一文字の音響に觸れゝば、思は遠く平安時代の昔に遡る。江戸時代に入つては、歌學の研究は進んで國學となつて、大いに忠君愛國の思想が鼓吹される事となつた。幕末勤王の士は皆和歌を口ずさんで、その忠君愛國心を吐露した。

かくして、皇室は道德の本源であらせられたばかりでなく、また風流文雅の中心であらせられたのである。文藝ばかりではなく、音樂、禮儀、一切の有職の淵源であつたのである。兵馬の權が武門に移つて後も、一切の名譽、光榮の中心は朝家にあつたのである。武家時代に生れた人々も皆みやびの心を持つて、朝家を仰ぎ、古代に憧憬したのである。

有職　故實典禮を取調べる學問。こゝは故實典禮そのものをさす。いうそくともいふ。

吉田兼好　鎌倉時代末期の文學者、歌人。京都の人。正平五年（二〇一〇年）寂、年六十八。

一三　鼎法師

吉田兼好

仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、おの〳〵遊ぶ事ありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顏をさし入れて舞出でたるに、滿座興に入る事かぎりなし。しばし奏でて後、拔かんとするに大方拔かれず。酒宴事さめて、いかゞはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血たり、たゞはれにはれみちて、息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず。響きてたへ

いかゞはせんと惑ひけり

かなはで　すべきやうなくて

向ひ　ねたり　有様　さこそ　ことやう　なり　けめ

聞く　らん　とも　覺えず

がたかりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なるくすしのがりゐて行きけるに、道すがら人の怪しみ見る事かぎりなし。くすしの許にさし入りて向ひゐたりけん有様、さこそことやうなりけめ。ものをいふもく〳〵もり聲きて聞えず。かゝる事は書に見えず、傳へたる教もなし」と言へば、また仁和寺へ歸りて、親しきもの、老いたる母など枕上によりゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝる程に或者のいふやうは、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらん。

この様なことは書籍にもありません

鼎法師（繪本徒然草所載）

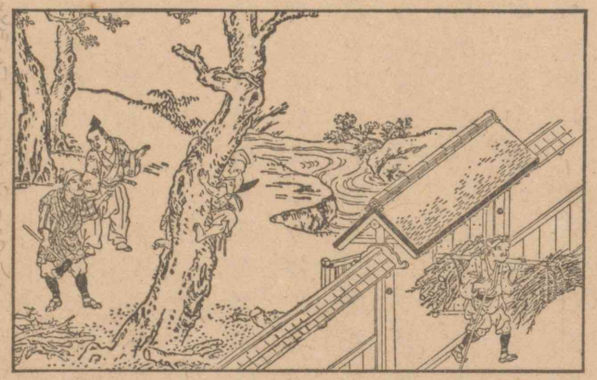
人を　おきて　て高き　木に　昇せて　梢を　きらせし　に

飛び　おる　とも　おり　なん

たゞ力をたてて引き給へ」とて稟のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻かけうげながら拔けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

○

高名の木のぼりといひし男、人をおきて、高き木に昇せて梢をきらせしに、いと危く見えし程はいふ事もなくて、おるゝ時に、軒たけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるともおりなんいかにかくいふぞ」と申し侍りしかば、その事



高名の木のぼり（繪本徒然草所載）

木登りの名人

指すする

太夫　危ない

ゆだんをするな　注意しておりよ

言った所が　そのすすよ

飛びおりてもおりて来る

あやまちは安きところに仕る事に候なりて必ず

一つをおろかにせんと思はんや

に候。目くるめき、枝危き程は、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちは安きところになりて、必ず仕る事に候。といふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたきところを蹴いだして後、易く思へば、必ず落つと侍るやらん。

○

或人弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく、初心の人、二つの矢を持つ事なかれ。後の矢を頼みて、初の矢になほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、このひと矢に定むべしと思へ。といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんやゞけたいの心自ら知らずと雖も、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕べには旦あらん事を思ひ、旦には夕べあらん事を思ひて、重ねて懇に修せん事を期す。いはんや一刹那のうちに於て、けたいの心ある事を知らんや。何ぞ只今の一念に

正直の人などかならんおのれすなほならねど

舜支那古代の聖天子。有虞氏。

おいて、直ちにする事の甚だかたき。

○

人の心すなほならねば、いつはりなきにしもあらず。されど、おのづから正直の人などかならん。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚かなる人は、たま〳〵賢なる人を見てこれを憎む。大きなる利を得んが爲に少しきの利を受けず、いつはり飾りて名を立てんとす。とそしる。おのれが心にたがへるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず。いつはりて小利をも辭すべからず。假にも愚を學ぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば卽ち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば惡人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。いつはりても賢を學ばんを賢といふべし。

（徒然草）

白鳥省吾　詩人。明治二十三年宮城縣に生れた。

一四　縄跳ね

白鳥省吾

みんなほゝゑんで、
十から十二三の少女たち、
一すぢの縄を通りにひいて、
縄はねしてゐる。

みんなほゝゑんで、
たのしさは一本の縄に集る。
きれいな著物から
光のやうに躍り出す足。

この美しい少女たちは
ほんたうに高く跳ねる。
快活に、翼をもつてゐるやうに、
すんなりした身體つきで。

少女たちの高く跳ねるのは、
全く似合つてゐる。
空に燃える太陽に、
六月のあかるい朝風に。

吉江喬松　文學博士。孤雁と號した。長野縣の人。昭和十五年歿、年六十一。

一五　初夏のパリ

吉江喬松

リラの花が咲き初める頃のパリの晩春初夏の氣分はいかにも柔かく、和やかで、日沒後の長い黄昏時が、西空を牡丹色に染めて、それがセエヌ河上に反映し、ノオトル・ダムの尖塔や、サン・ヂャックの塔

つい……出掛けずにはゐられない

をその輝の中に浮び上らせ、空氣はほんのりと溫かく、しかも透明で、物象すべてが言ひがたい懷かしさの中に包まれてしまふ。外氣の誘惑といふものをつく〳〵身に感ぜずにはゐられぬ。じつとして室内に籠つてゐられずに、つい戸外の當てなしの散歩へ出掛けずにはゐられない。フランス人は散歩が何よりも好きである。空氣を取るといふ事を何時も言ふのであるが、その習慣は恐らくかうした柔かな、ほの溫かなどこまででも誘つて行かずにはおかぬ大空の力と、美しい夕映とが、人々の上へ手を伸して來た必然の結果であらう。

しかし、その柔かな、ほんのりとする透明な空氣の中を、西空に遠く、長く〳〵たゆたつてゐる夕陽を仰ぎながら、パリの城壁を外に出て、どこともなくさまよつて行く人々の頭の上に、俄に打出される、何か覺醒でも促すやうな鐘の音、アンジュリユスの鐘の音こそは、

リラの花は……叢花であつて……咲いてゐる

薄紫の叢花は……搖めきそゝらずにはおかぬ

さうした天然の背景の中に於て、最もふさはしい夕べの空の音樂である。

リラの花は薄紫の叢花であつて、さうした夕暮の、路傍の藪蔭にどこにでもほのめくやうに咲いてゐる。つゝましやかで、おぼめかしく、何となく幽艶な色調が、空に消え行く鐘の音のたゆたひを、ほの暗くなつて來た森の徑の末々に漂はせるやうにして咲いてゐる。懷かしさそのものゝやうな薄紫の叢花の搖めきは、人の情緒をそゝらずにはおかぬ。

菩提樹は並木としてどこにも見られる。リラの花が初夏よりも寧ろ晩春を思はしめるのに比べれば、この菩提樹の若葉こそはまさに初夏の風景そのものである。柔かく、重なるやうに繁茂するその葉の一路遠く立續く樹下途は、初夏の午前には特に好ましい眺である。その樹下途へどこからとも知らず、むく〳〵として湧上る

番犬が……目的の方向へ行く導いてのである

ちら〳〵と……投じ

その高い事薫は……の更に香ぐはしい

やうに乳白の一團の獸群が遠く見え出して來る事がある。これも時としてパリ郊外に於て見かける初夏の風景である。羊の群の放牧の姿である。鈴の音が爽かに午前の大氣の中に鳴り渡る。番犬が吠えながら、その長い一列の羊群の兩側を駈廻つて、道草を食つたり、後へそれたりするものどもを追立てて、目的の方向へ導いて行くのである。牧人等は寧ろその群羊の波の中に、長い杖を立てて、船にでも乘つてゐるやうな恰好をして流されて行くだけで、その一群を指導して行くものは番犬どもである。

菩提樹の若葉はちら〳〵とその葉影を、下に流れる羊群の上に投じ、やがてその細やかな黄ばんだ花が咲出すと、その薫の高い事は、秋の澄んだ日本の大氣を香氣で充たす木犀よりも更に香ぐはしい。眞晝頃の六月空の下、菩提樹下の並木路はまさに咽せるばかりのこの花の香のトンネルである。目をあげれば、淡青の無數の若

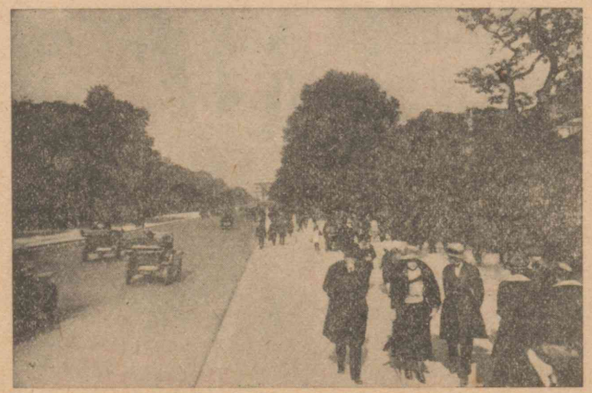
……交す如く……身を　せ　懍は

花粉の爲に……瀰漫せしめる

魚族の如くに……飛翔する

葉は互に何事か囁き交す如く、細やかに身を懍はせ、その香氣高い小花の房を恥づかしげに包み隱さうとでもするやうに、忙しげにひら〳〵飜り、その閃きの間から更に散りこぼれる花粉の爲に、初夏の大氣を一面に高い薫で瀰漫せしめる。この香氣の薫ずる眞晝の大氣の中を、無數の燕がまた群をなして、恰も大洋の暖流の中を泳ぎ廻る魚族の如くに、叫び聲を立てながら、何事か地上に、また空中に異常な事でも生じたやうに、何かの警告でもするが如くに飛翔する。

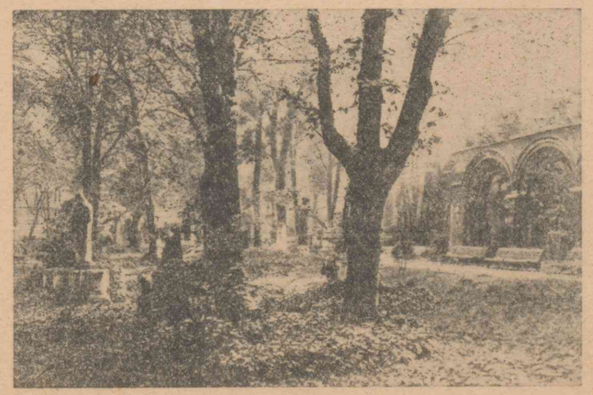
パリの郊外のどの方面にもある森林公園には、古くからの樹林



パリの街路樹（シャンゼリゼ）

さうした徑を夕方遲くなど歩いて行くと

が最も大切に保存されてゐる。ゴオル人の昔から森林を愛好する事は習慣であるが、今日もなほその習慣は持續されてゐる。その樹林の中には細徑が縱横に走つてゐる。さうした徑を夕方遲くなど歩いて行くと、ふと、遠く近く、くゞもつたやうな含み聲で、何かしら求めるやうに鳴き立てる鳥の聲を耳にする。ロシニヨルである。妙に幽艶で、惱ましく、そゝられるやうな、誰にもあれ我が心を訴へずにはゐられぬやうな氣持を起させる。これも古くからの傳說の夜鳥である。ナハティガル、ナイチンゲルとそれ〴〵呼ばれてゐる鳥である。かうして初夏

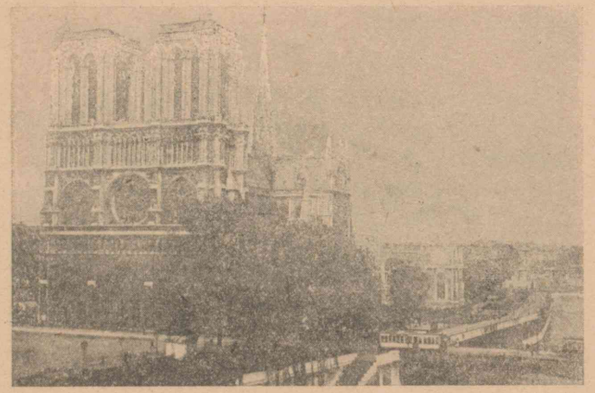


パリの森林公園

國を去つて三巴遠し、樓に登る萬里の春。唐の詩人、虞儀の「南樓望の詩」の句。

の黃昏のおぼめく氣分は、故國を遠く離れた遊子の身には一層の旅情を覺えしめるものである。クラマアルや、ムドンの森でいかに多くの人人が、昔から、この鳥の夜鳴く聲に初夏の情緒をそゝられた事であらう。

ノオトル・ダムの高樓に登つて見る。「國を去つて三巴遠し、樓に登る萬里の春」といふけれど、初夏の午頃、この高樓に登つて眺め遣るパリの初夏は更に旅愁を深からしめる。パリ全市が燻銀の如き一色で染められてゐる一大建築物の如き都市であるが、その時は若葉の緑で半ば以下を包まれて、セエヌの幾うねりがその間を縫つ

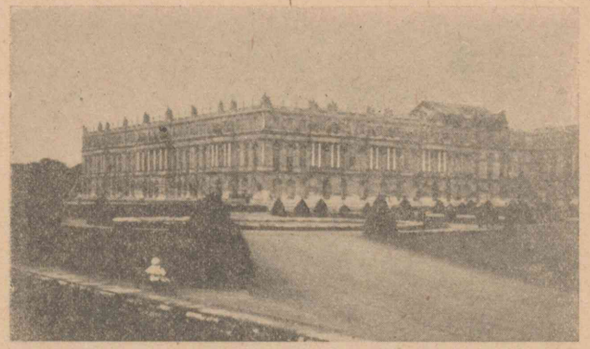


わづかに殘存してゐる城塞の外廓が大凡の區劃を漂はせて

ルーブル　今は博物館となつてゐる。パリの中心、セエヌ河の北岸。

エッフェル塔　佛人エッフェルが西紀一八八九年に建てた高塔。高さ三百メートル。

て流れ、その果は蒼茫として淡青の空の中に消えて行き、わづかに殘存してゐる城塞の外廓が大凡の區劃を漂はせて、四百萬の人々に安らかな、樂しい群居の生活を營ませてゐる。工場の煙突などは一條とて見られず、シャンゼリゼの大道がマロニエの若葉を煙らせて凱旋門へと續き、ルーブルの古王宮がセエヌ河に沿うて生きた歴史の記念を描き、幾條の橋がそれもそれ〴〵の歴史を物語りつゝ右岸から左岸へと渡され、エッフェル塔が大戰時の威嚇など忘れたものの如く悠然と聳えてゐる。若葉の集團はそれ〴〵の公園の所在地を標示し、天然と人工とが合作して作り



ルーブル

上げたこの大都市の蒼古の美觀は、今しその誘惑力を初夏の空へ向つて、思ふまゝに吐き出してゐるのである。

一六　歐米の婦人を觀る

堀口九萬一

我々が歐米の婦人を見て何よりも先に目に著く事は、彼等が概して强健な肉體と旺盛な活力との持主である事である。その生き生きして理智に輝く眼、その强い意志を思はせる高い鼻、廣い額、健康そのもののやうな緊張した筋肉、岩乘な骨格は、我が日本婦人の力なげな眼光、弛緩した筋肉、萎縮した骨格と著しい對照をなしてゐる。そして歐米婦人のその旺盛な活力と强健な體質とが、すべての言動の上に遍く反映して、彼等はいづれも活潑で、快活で、眞率で、何時も明るい氣分を以て、それ〴〵愉快にその仕事に從事してゐる。日本婦人の一般に餘りに控目がちで、ともすれば陰鬱で、不活潑

堀口九萬一　評論家。元外交官。慶應元年（一八六五）越後（新潟縣）に生れた。本文は特に本書の爲に執筆したもの。

その生き〴〵して理智に輝く眼

その働きぶりの眞劍さも……及ばぬところで

我が國の人々には……あるやうでもあるが

で、何とはなしに暗い氣分のうちに生活してゐるやうなのとは正反對である。

その働きぶりの眞劍さも、すべてに微溫的な日本婦人の想像も及ばぬところで、彼等の勉强力と、忍耐力と、意志の力との强い事は、我が日本婦人の遠く及ばぬところであらう。殊にその時間の價値を知つて、働くべき時間にはよく働き、そして休むべき時間、遊ぶべき時間にはこれまたよく遊び、よく樂しむところ、我が日本婦人の大いに學ぶべきところであらう。

我が國の人々には、ともすれば、歐米婦人は日本婦人のやうに朝夕の炊事などには立働かぬものの如く思ひこんでゐる人もあるやうであるが、これは非常な思違で、歐米諸國でも餘程の貴族、若しくは千萬長者の家族と言つたものは別として、普通金持と言はれるくらゐの家庭の婦人は、いづれもよく働いて、日本のやうに一家

安價で新鮮で且榮養價値に富み、その上夫や子供の嗜好に適した物

彼等は……に見える

の主婦が自ら家事に手を觸れる事を好まないで、多くの召使を使用して、これに家事の萬端を任せるやうな風は、歐米諸國には決して見られない。まして一般家庭の主婦などは、衣類の手入、洗濯、臺所の仕事、その他、家事一切を擔當し、毎日自ら市場へ出掛けて行つて、安價で、しかも新鮮で、且榮養價値に富み、その上、夫や子供の嗜好に適した物を選擇して購ひ歸り、煮炊までも自分でする事、我が國一般家庭の主婦と少しも異なるところがない。しかも、我が國一般家庭の主婦には、さうした働をひそかに心恥づかしく思つてゐる風があるのに對して、彼等は堅實な經濟思想に立脚して、寧ろこれを主婦の誇としてゐるやうにさへ見える。

歐米婦人の概して常識が圓滿に發達してゐる事も、我々の驚異に値するところである。教育普及の程度は、我が日本婦人も彼等に比してさ程劣つてゐるとは思はれないのに、實際上かうした優劣

思ふに……缺けてゐるからではあるまいか

打てば響かんばかりの聰明さは

以上は……略述したのであるが

を來すのは、思ふに我が國の社會的教育の不備と、婦人各自の注意とが缺けてゐるからではあるまいか。歐米の婦人は、平素、社會萬般の出來事に深く注意して、一般物價の高低から、經濟界の變動は勿論、文學や、美術や、科學の進歩發達、または內外政治の狀況に至るまで一般的概念を把握せんと努力してゐるので、その話題の豐富な事は、眞に驚くべきものである。特に英、佛、米などの婦人の、打てば響かんばかりの聰明さは、實に尊敬に値する。これは要するに、歐米婦人が讀書の良習慣をもつてゐて、日常新聞や、雜誌や、書籍に親しみ、これによつて自然常識を涵養發達せしめるので、これは是非とも我が國の婦人の日常生活にも取入れたいものである。

以上は專ら歐米の婦人の通性に就いて略述したのであるが、今試に英、佛、獨、米四箇國の婦人の特色を擧げてみよう。

英國婦人の意志が極めて强固で、且いかにも落著いてゐて、容易

働して……秀で

……點は……共通であるが

にものに動じないところは、確かに英國國民性の一端を窺はしめる。その子弟の教育に就いては頗る深く注意し、幼時より獨立自尊の念を養成しようと努めてゐる。且英國婦人は家庭本位であつて、これを愛し、これを尊重し、且その保護者を以て自任するの觀がある。しかのみならず、その夫の相談役として、內外共に夫を助けて行くところに、その深い素養と聰明な理智とが推察される。これは米獨婦人などの企及する能はざるところである。英國婦人は概して各種のスポーツに秀で、特にテニス、水泳、乘馬の如きは、男子とその技を競うて、何等遜色のない者が少くない。

佛國婦人のその夫の相談役となつて、夫の業務を助けると同時に、家庭內部の王者であり、子弟の保護者である點は英國婦人と共通であるが、その外に佛國婦人は極めて節儉で、家庭の經濟と臺所の切回しとの巧妙な事は、周知の事實である。しかし、それと同時に、

佛國婦人は……趣味をもつてゐて

ドイツ婦人は……天下無敵であらう

三つのK臺所、子供、教會の三つで、ドイツ語ではいづれもKを頭文字としてゐる。

また社交的婦人たる事に於ては、これ實に佛國婦人の獨擅場であつて、活潑のうちにしとやかさを織込んだその接客ぶり、その愛敬、その機智、その手際は、決して他の歐米婦人の追隨を許さぬところである。特に佛國婦人は高雅な、且洗煉された趣味をもつてゐて、パリ婦人の衣裝や化粧法などは、常に世界流行の魁をなしてゐる。その他佛國婦人には、概して美術思想が發達してゐて、文學、繪畫、彫刻等の理解、鑑賞、共に自餘の外國婦人に嶄然卓越してゐる。

「よい世話女房」の一語こそは、全くドイツ婦人に當嵌まる言葉である。實際ドイツ婦人は、佛國婦人のやうな高雅な趣味や、社交的才能や、且また英國婦人のその夫のよき相談役となるやうな技能こそは稍缺けてゐるにしても、家庭に於ける世話女房としては、恐らく天下無敵であらう。これは實にドイツの一俚諺の通り「婦人は三つのK」であつて、臺所、子供、教會が古來ドイツ婦人の生活の全部を

生活の全部を系統的特色である

米國の男子が……勇往邁進する

その婦人もまた……と努める

なし來つた系統的特色である。それ故、ドイツ婦人は優雅ではないが質實であり、上品ではないが剛健である。加ふるにその强健な體質と、その旺盛な勞働力と、横溢した活力とを以て終日倦む事なしに敏活綿密に家事に鞅掌するところは、まことに尊敬すべきである。

米國の男子が新興國の氣魄を以て、大膽に大げさに各種の事業に勇往邁進すると同じく、その婦人もまた自分で働いて自活の計を立て、以てその自由と獨立とを取得しようと努めるところは、確かに米國婦人の特色である。が、若し一旦嫁して家庭の主婦となるに及んでは、官廳、會社、銀行、店鋪、その他各種工場、農場などで働いて、文字通り終日忙殺されて歸宅するその夫を慰め、晩餐の食卓を挾んで、その日の新聞の記事や、論說や、または雜誌などの評論を語り、若しくは讀書によつて得た新知識を要約して話すなど、讀書の餘

裕のない夫を啓沃援助する心遣の周到深切な事は、その言語動作の自由で率直で奔放な事と共に、他の外國婦人にその例を見ないところである。

以上述べたところによつて、歐米婦人の特性の一斑はほゞ察せられた事と思ふ。

今や交通機關の發達は著しく世界の距離を短縮して、我が國の婦人も單に日本婦人としてばかりでなく、世界の婦人として、列國婦人と並び行かねばならぬやうになつた現代に於ては、我が國の婦人たるもの、よく彼等の長所に考へ、我が短所に顧み、以て採長補短の實を擧げ、益〻その地位を高めるやうに努めなければならぬ。

歐米婦人の特性の一斑はほゞ察せられた事と思ふ

幸田露伴　小說家、文學博士。名は成行。慶應三年（二五二七年）江戸に生れた。

一七　雲のいろ〳〵

一　夜の雲

幸田露伴

夏より秋にかけての夜、美しさ言ふばかりなき雲を見る事あり。都會の人多くは心附かぬなるべし。舟に乘りて灘を行くをり、天暗く水黑くして、月星の光もれず、舷を打つ浪のみ靑白くさわだちて、心細く覺ゆる沖中に、夜は丑三つとも思はるゝ頃、艙上に獨り立つて、海風の面を吹くがまゝ衣袂濕りて重きをも問はず、寢られぬ旅の情を遣らんと詩など吟ずる時、稻妻忽として起りて、水天一齊に凄じき色に明るくなり、千疊萬疊の濤の頭は、白銀のかんざしした る如く輝き立つかと見れば、怪しき岩の如く、獸の如く、山の如く、鬼の如く空に峙ち蟠りゐし雲の、皆黃金色の笹緣つけて、いと嚴かに人の眼を驚かしたる、言はん方なく美し。

かんざし（簪）

二　雨後の雲

雨後の雲の美しさは山にてこそ見るべけれ。低き山にゐたらんには、なほかひなかるべし。名ある山々をも眼の前、脚の下に見る程

低き山にゐたらんにはなほかひなかるべし

の山にありて、夏の日の夕べなど風少しある時、溪に臨みて遠近の雲の往來を觀る、いと興あり。前山の翠の色一入增して、裾野の風情も見所多く、一郭なせる山村の寺などそれかとも見ゆるに、濃く白き雲の、足疾く風に乘りて空に翔くるが、己の形をも、且龍の如く、且虎の如く、飜りたる布の如く、張りたる傘の如く、さま〳〵に變へつつ、山を蝕み、裾野を被ひ、山村を呑みつ吐きつして、前なるははふやうに去るかと見れば、後なるは飛ぶ如くに來りなんどする狀、觀てあくといふ事を覺えず。小山の峯通り立てる松の並木の、遠見には馬のたてがみのやうなるが、現れつ隱れつする、金字形したる山の巔の、心あてに見しあたりならぬ所に突として面出す、殊に面白し。

山村を呑みつ吐きつして

たてがみ（鬣）

丹波太郎　丹波國（京都府）の方面に當る山から出る雲。

西鶴　江戸時代中期の文豪。姓は井原。大阪の人。元祿六年（一六九三年）歿、年五十二。

三　坂東太郎

丹波太郎は西鶴の文に出でたりと覺えたり。坂東太郎は未だ古人の文にその風情を記されざるにや。雲にも人に知らるゝ知られざるのあるもをかしし。坂東太郎は東京にて夏の日など見ゆる恐しげなる雲なり。夕立の今や來らんといふやうなる時、空の半ばを一面に蔽ひて、十萬の大兵、野を占めたる如く動かすべくもあらぬさまに黑みわたり、しかもそのうちに風を含みたりと覺しく、今や動き出さんとする風情、まことに一敗の後の將卒、必死を期して盡く靜まり返つたるが中に、勃々として抑ふべからざる殺氣を含めるが如し。この雲天に漲るとやがて、風ざわ〳〵と吹きおろし、雨どつと落掛り來る習にて、あらしめきたる空合にこの雲の出でたる、またなく物凄じく、をかしき形などある雲とは異なりて、秋水の千里を浸

人に知らるる知られざるのあるもをかし

動かすべくもあらぬさまに

あらしめきたる空合

坂東太郎（積亂雲）

し犯す如く出で來れる、宏壯の趣ありて、心弱き兒女の愛する能はざるものなり。

四　いわし雲

いわし雲といふは、いわしなどのむるゝ如く、點々相連なりて空に漲るものを言ふなり。晴れたる日の夕暮など多く見ゆるなるが、雨氣を含むものにや「芝浦の漁人も網をうち忘れ月には厭ふいわし雲かな」といへる狂歌、天明の頃の人の詠にあり。青き空の半ば程、この雲白く連なりて亙れる、風情ありてうるはし。童兒などのこの雲を指さして、いわしの取るゝ兆なりと言ふもまたをかし。

いわし（鰯、鰮）

童兒などの：言ふ

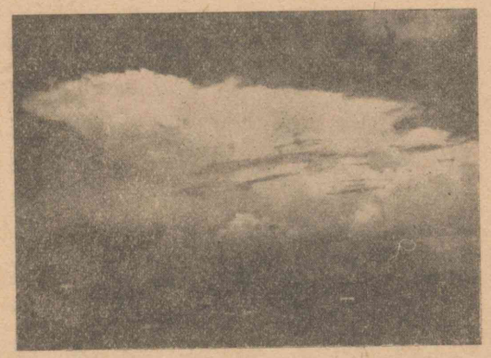
いわし雲（卷積雲）

五　かさほこ雲

南の方の空にさしがさを開きたるやうに立つ雲を、かさほこ雲と言ふとぞ。その雲やがて破れて、その破れたる方より風吹くと聞きたれど、市中にのみ住める身の、未だよく見知るべき時に會はざるこそ口惜しけれ。

六　かなとこ雲

東の方に築地をつきたる如く立つ白雲を、かなとこ雲と言ふ由なり。かなとこは鐵砧にて、その形鐵砧に似たればなるべし。その雲まづ退けば西風強く吹き、立上れば足を下して雨となると傳ふ。東に白雲の築地の如く見えたるは眼にしたれど、なほかなとこ雲の風情といふを知らず。（讃言）



かなとこ雲（積亂雲）

市中にのみ住める身の：會はざるこそ口惜しけれ

隅田川は…大河であつた

都鳥に望郷の情を云々「名にしおはゞいざ言問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（伊勢物語）

一八　隅田川の今昔

武藏野の東の果を限る隅田川。江戸開府以前まで、隅田川は利根と荒川と二つの河が東西から流れ注いで、やがて潮の海となる一望際涯なき平野の中の大河であつた。遠い平安朝の昔、在原業平がこの川の渡頭に立つて、夕闇の中にほのかに白い都鳥に望郷の情を寄せて以來、はる〳〵と東國に下つて來た人々は、皆同じやうにこの川の渚に思ひ〳〵の風懷を恣にした。

東の渚に幽村あり、西の渚に孤村あり、水面悠々として、兩岸にひとしく晩霞曲江に流れ、歸帆野草を走るかと覺ゆ。筑波蒼穹の東に當り、富士碧落の西にありて絶頂はたへにきえ、裾野に夕日を帶び、朧月空にかゝり、扁雲行きつくして四域に山なし。

浪のうへの昔をとへば隅田川

文明年間　第百三代後土御門天皇の御代（二一二九—二一四六年）

堯惠　堯孝法印の門に入り和歌を修めた。

向島　本所區新小梅町から向島區隅田町に至る川岸一帶の地の總稱。

慶長　第百七代後陽成天皇の御代（二二五六—二二七四年）

かすみや白き鳥のなみだに

戰國時代の末、文明年間に、北國への途上この川を過ぎた堯惠法師はかう書いた。これがその頃までの隅田川の實景であつたらう。

江戸に幕府が開かれてこの方、利根の流を排して河路を正し、堤防を改築して洪水の難を防いだ。汀を蔽うた蘆荻は刈られ、岸には桃と櫻と柳とが植ゑられた。嘗て萬里孤客の友であつた隅田川は、今や變じて華美を追ふ都人が四時遊樂の境となつた。

江戸人が一年最大の行樂は花見、花見の興は隅田堤向島を最高頂とした。雲に入るかと思はれる程に花を開いた枝の重なる所、人はまづ花に醉ひ人に醉つて、行く足もとゞまらず、老幼貴賤おしなべて、狹き堤におしあひへしあひ、長い春の一日の暮れるも知らなかつた。

慶長の頃、夏の日の炎暑に苦しむ人々が、ひらた船に屋根を作り

浅草川　隅田川と同じ。橋場、今戸以南にのみこの名がある。

綾瀨　足立區綾瀨町。

加藤千蔭　江戸時代末期の國學者、歌人。文化五年（一八〇八年）歿、年七十五。

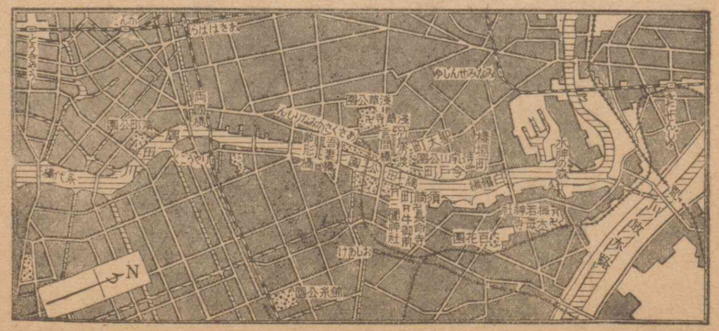
大川の川開　毎年七月の半ば過から月末までの日に行ふ。

かけ、これを借りて浅草川を乘廻したのが納涼船の初めとか。兩國橋、百本杙のあたり、隅田川は大川と改つて川幅百間餘、昔は夜船にかがりを焚いて白魚を捕つた。水は清く流は緩やかであつた。川上に溯つては、千住、綾瀨の奥までも杜鵑の聲を尋ね、川下に下つては、品川、羽田の海に投網の興を追ふ。或は橋下に船を繫いで飲食し、絃歌を湧し、半日の樂しみに炎熱を忘れた。

すみだ川堤に立ちて舟待てば
水上とほく鳴くほとゝぎす

加藤千蔭

殊に大川の川開、玉屋、鍵屋の花火の上る日



この人數云々　「この人數船なればこそ涼みなれ」（其角）

江戸の人士は一夜をこめてこの一瞬の美觀を樂しんだ

しやう（笙）
ひちりき（篳篥）

は、橋の上は人、下は船、「この人數船なればこそ涼み」とも言はれし熱鬧叫喚、見るも聞くも凄じい騷の中に、花火は爆音と共に空中に彈けて、天をも焦すばかり、壯絶人の膽を脅した。江戸の人士は一夜をこめてこの一瞬の美觀を樂しんだ。蓋し現世享樂の日本人、殊に刹那に一生を享樂し盡して悔いない江戸人の氣質には、花火の遊はまことに快適のものであつたに相違ない。高尾丸、川一丸、吉野丸、神田丸などいふ八九間から十間くらゐの大屋形船も川に浮んだ。酒を賣る舟、肴を賣る舟、菓子を賣る舟は、酒肴の盡きた頃を見計らつて、その船の周圍を漕歩いた。風流人は川上に船を上せて、しやう、ひちりきなどを吹きすさんだ。

實に隅田川は花火の行事を中心として、江戸の夏を忘れさせたのである。

向島の百花園に秋を探る人もまた多かつた。

梅と共に七種の秋草をそろへてこの園中に植込んだのは、文化、文政以來の事であつたが、園主鞠塢の風流を愛して千蔭は行燈に書き、蜀山、詩佛は門聯に題した。當代の學者文人の鼓吹に促されて、一面閑寂を愛し風雅に執する都人は、爭つて杖を此所に曳き、或は鮮麗に、或は清楚にとり〳〵の花を賞翫した。そして清明の夜は金龍の躍るが如き月の光を碎いて、夜もすがら江上に船を浮べ流に溯り、詩を賦し歌を詠んだ。

幕末から明治へかけて、向島は一時文學藝術の淵藪となり、江戸文化の夕陽の光を此所に留めた。

冬深く、雪の眺はまた一段の風情があつた。近くは竹屋の渡から遠くは水神の森まで、まして三圍堤長命寺の邊に佇んで、一筋黑く埋め殘した川面を見渡した景色は、そのまゝに詩であり繪であつたらう。

鞠塢　佐原平八。仙臺の人。文事の素養があり、俳諧を善くした。天保二年（一八三一）歿、年七十。

千蔭は行燈に書き云々　「おきさこしめせ梅干もさふらふぞ」と書いた。

蜀山　狂歌師蜀山人。

詩佛は云々　詩人大窪詩佛で、「春夏秋冬花鳥風月、東西南北人自ら來る。」と題した。

長命寺　今本所區向島須崎町。天台宗、德川氏入國以來の寺。

いざさらば雪見にころぶところまで

その境内に殘る芭蕉の句碑が、その昔の懷かしさを物語つてゐる。

更に對岸待乳山聖天の森から隅田川を望めば、眼路の限り一面の地平は、雪に降り白められた葛西二郷、目の下の町は歌にも殘る橋場、今戸の人家に、二筋三筋細々と上る夕煙を殘して、靜かに雪の中に暮れて行くのである。

四季の眺望、をり〳〵の享樂に、隅田川は江戸時代を通じて江戸の人士になくてかなはぬ悅樂の別天地であつた。しかし、悠々として流れ、逝いてはまた歸らぬこの川の水と等しく、人は逝き時は移つて、三百年の大江戸のありし日の事どもも、今は悉く思出の中に蘇るのみとなつた。

夕立や田をみめぐりの神ならば

待乳山　今淺草區聖天町待乳山公園。震災後は聖天の森はなくなつた。

葛西二郷　今の葛飾區あたりの舊稱。東葛西、西葛西の二郷に分れてゐた。

橋場、今戸　今淺草區橋場町及び今戸町。大川の西岸。

逝いては歸らぬこの川の水と等しく

三圍稲荷　今本所區小梅町。隅田公園の北に接する。

牛御前　今本所區向島須崎町。

梅若丸　吉田某の子。母は京都北白河の人。今梅若神社に祀られてゐる。

木母寺　今向島區隅田町。天台宗。

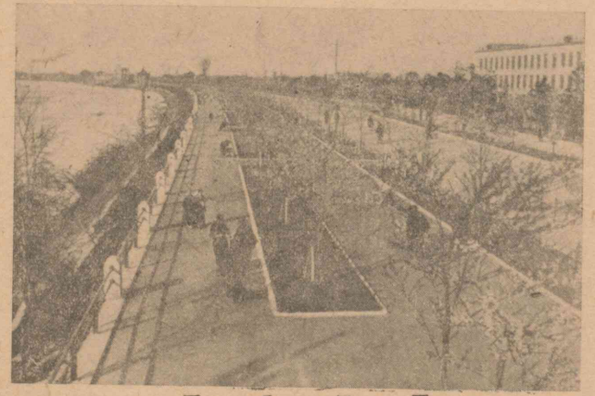
寶晉齋其角の俳句供養に感應し給うたといふ三圍の稲荷社、或は平安朝以來の由緒をもつた牛御前王子權現の社、謠曲「隅田川」に子を尋ねて狂ふあはれな貴女の物語、その梅若丸の故事に名高い梅柳山木母寺など、隅田川をめぐる舊蹟の、好事家の爲に殘されたものも今なほ多いが、昔、向島に數寄を凝した風流人の別業、或はさゝやかな隱士の閑居など、明治時代を最後としてたび〳〵の水害に壞れ、主もその人を代へて追々廢れ、土地は多く拓かれて工場町に變つた。

木母寺（葛飾北齋畫）

江戸は東京となつた。

江戸人は東京市民の名を以て呼ばれる。

隅田公園　隅田川の岸に沿ひ、新小梅町から向島須崎町に至り、向島堤を含む。臨川公園としてロンドンのチムズ・エンバンクメントに比せられる。



隅田公園

兩岸の到る所に林立する工場地帶の煙突は、昔ながらの隅田川に、俄に近代風景を現出し、文明的施設をもつ隅田公園に、新たに植ゑられた洋風の街路樹が、若々しい光を誇つてゐる。そして兩岸に架け渡された長大な橋、それ等は皆さま〳〵な新しい樣式を備へて珍しく、科學文化の粹を競ひ合ふ。けれども江戸の名殘は言問、白鬚、吾妻、駒形、永代などその橋の名に留められて限りない懷古のよすがとなつてゐる。

江戸の頃江戸を語るに隅田川を以てしたと同樣、また大東京の偉觀は、著しく近代化された隅田川に

よつて、まづ知る事が出來るであらう。

緩やかな水をたゝへる隅田川の流は、江戸から東京へ時代の推移をそのまゝに浮べて、盡きようとしない。

西澤勇志智　理學博士。明治十五年東京市に生れた。

泡を食つてあわてて。

ネオンサイン　ネオン瓦斯を入れた硝子管に放電させたもので、美しい赤橙色の光を放ち、よく人目をひくので廣告用にされる。

イルミネーション　電燈照明による飾。

自修文

花火の趣味

西澤勇志智

「暗きに住む人來り仰げ」といふ讃歌があります。これは永遠の光を仰ぎ見よといふ事でありますが、泡を食つて讀むと、花火でも見に來いといふ意味に勘違ひしさうです。しかし、花火の光は一瞬の光を樂しむのであつて、光が長引く事は寧ろ嫌ふのであります。星月夜の空にぱつと地から湧いたか、天から降つたかと思ふ一瞬の光が花火の生命であつて、花火の代りにネオンサインで空にイルミネーションをやつたらよからうといふやうな考

花火道の外道　花火本來の精神からはづれたよこしまな行き方。

落武者　戰に敗れて逃げて行く武者。

は、花火道の外道であります。

しかもこの一瞬の光は、鮮かに強き閃きでなければなりません。釣人と言つて、電氣のやうな光が中空にふらり〳〵と長く漂うてゐるのがありますが、これは花火本來の眞意ではなく、寧ろ餘興であります。

鮮かな閃きは一齊に空を飾らなければなりません。或物が先に、或物が後れて模樣を描くやうなのは、花火として不手際なものであります。

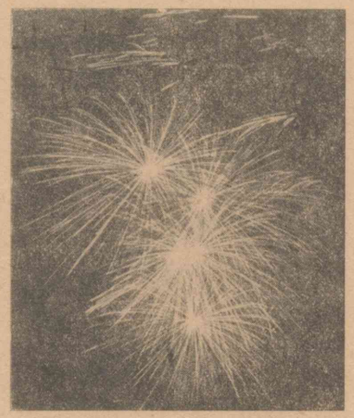
一齊に輝いた花火は、その消え際がまた一齊でなければなりません。群星既に光を空から隱してしまつた後に、一つ二つよちよちと光を殘してゐるのは、落武者のやうな慘めさであります。

一陣の風に殘りなく散る櫻花の姿をこそまた花火に求むべきでありませう。

一瞬の光の美を保つものは、また整然の美しさをも持つてを

らねばなりません。混亂と雜然とは、花火に忌むべきものであります。花火の描く模樣、いはゆる盆の中に、拔星と言つて最後まで光を出さぬ星があつて、模樣の中に斑點が出來てはなりません。光の位置は各その所を得て、一絲亂れぬのを尊ぶのであります。

光の强さは紫、赤いづれも均等なるを要します。とかく綠は光强く、紫は光弱く感ずるものでありますから、藥の加減によつてこれを調整しなければなりません。赤の後に現れる黃が綠色に感じ易いのは、眼の錯覺によつて起るのであります。



花火

眼の錯覺　眼のあやまつた感じ。

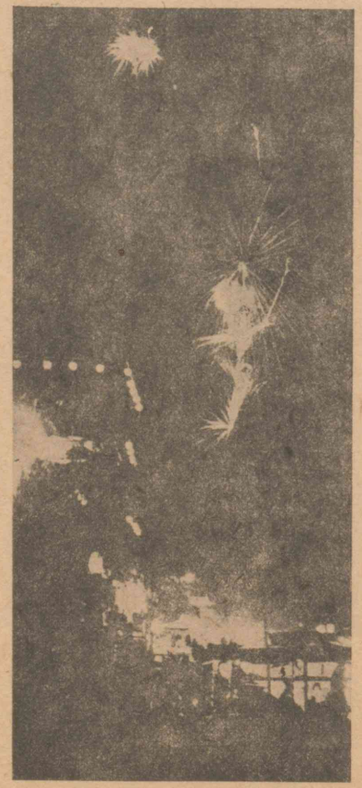
ストロンチウム　元素の一。柔かい銀白色の金屬。赤色花火を作るに用ひる。

すから、花火師はこの錯覺をも考慮に入れねばならないのであります。

花火の色には、明治十三、四年以來、洋藥と言つて、ストロンチウム、バリウム、その他の藥の使用が傳來されたのでありますが、その以前はわづかに硫黃を燃して青い光とし、鉛、樟腦を燃して青白い色を出してゐたに過ぎず、大體は炭の燃える光で滿足してをつたのであります。隨つて江戸時代の花火といふものは、今日の花火とは著しく趣を異にし、光が寧ろ一種の淋しみをさへ添へた事が窺はれるのであります。蕪村の句に

花火せよ淀の御茶屋の夕月夜

とあるのも、夕月夜の一種の淋しみに花火のふさはしさを感ず

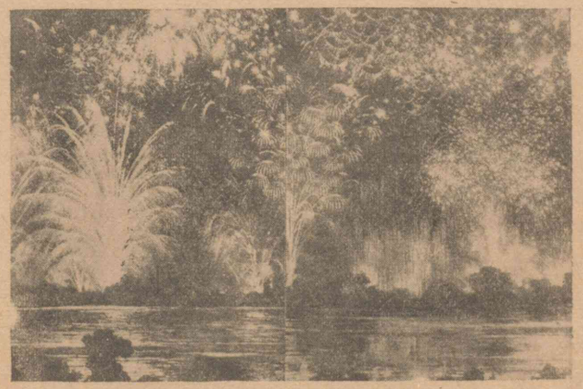


花火

バリウム　元素の一、柔かい銀白色の金屬。綠色花火を作るに用ひる。

對稱の美　眞中から二つに分けて見た時その左右が正しく相對する形を持つてゐるその美しさ。

るのであります。日本の花火は、この炭火の時代に苦心して得た技巧に新たな洋藥の使用が加つたのであります。そして今日は世界にその優秀を誇り得るやうな技術にまで達してゐるのであります。あの美しい花火が開いて、對稱の美を完全に保ち、少しの亂れをも起させない技巧は西洋の花火では、到底見られません。



ロンドンハイドパークの花火

このやうな技巧には、花火の玉の割れる時期にまでも細かい工夫が用意されてあります。即ち玉の割れる時期は、打上げられた花火が空中に進行を止め、引力によつてまさに下り來らんとする時、言換へれば玉の進度が零となつた時に破裂して星を開くやうに、割藥の導火が正しく加減されてあるのであります。若し玉が上つて行く途中、または下つて來る途中に破裂すれば、開いて現れた星の形は正しい水平を保たず、傘のやうな形をなし、星の位置もおのづから崩れがちとなるのであります。また玉が割れて星の飛ぶ距離や進度を加減するには、主として星の比重、形、及び大きさ等によつてなされるのであります。

比重　重さ。

永生とか永遠とかいふ事に注意をひかれがちな西洋思想と、花と散るを潔しとした武士道の思想とは、花火の上にも及んでをります。西洋人は數十本の狼煙花火を一時に低く打上げて、それに色ある焚火をさへ差加へて、時餘に及んでその光を觀賞するのに反し、日本人は非常に均齊のとれた光の整列を、一瞬時樂しむ事を花火の主眼と心得てゐるやうに思はれます。

金剛寺　今大阪府南河内郡天野村。行基の開基。

五穀を食はねども苦しみなし

我は仙人になんとするなり

一九　人間の智慧

一　松葉仙人

河内國金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、「松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦しみなし。よく食ひおほせつれば、仙人ともなりて飛びありく。」といふ人ありけるを聞きて、松の葉をこのみ食ぶ。まことに食ひやおほせたりけん、五穀のたぐひ食ひのきて、やうやう二三年になりにけるに、げにも身も輕くなる心地しければ、弟子どもにも、「我は仙人になりなんとするなり。」と常はいひて、今々とて、うち〳〵にて身を飛びならひなどしけり。「既に飛びて登りなん。」といひて、切も何も弟子どもにわかち讓りて、「登りなば仙衣を著るべし。」とて、かたの如く、腰にものをひとへ卷きて出立つに、「我が身にはこれより外にいるべきものなし。」とて、年比祕藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰に著けて、既に出でにけり。弟子、同朋、名殘を惜しみて悲しぶ。聞及ぶ人、遠近市の如くに集りて、「仙に登る人見ん。」とてつどひたりけるに、この僧、片山のそはにさし出でたる巖の上に登りぬ。「一度に空へ昇りなんと思へども、まづ近く遊びて、事のさま人人に見せ奉らん。」とて、「かの巖の上より、下に生ひたりける松の枝にゐて遊ばん。」といひて、谷より生ひのぼりたる松の上、四五丈ばかりありけるに、さけざまに飛ぶ。人々目を澄し、あばれを浮べたるに、いかゞしつらん、心や臆したりけん、かねて思ひしよりも身重く、力うきうきとして弱りにければ、飛びはづして、谷へ落入りぬ。人々あさましく見れども、「これ程の事なればやうあらん。さだめて飛揚らんずらん。」と見る程に、谷の底の巖に當りて、水瓶も割れ、我が身もさんざんにうち損じて、たゞ死にに死ぬれば、弟子、眷屬騷ぎ寄りて、「いかに。」と問へば、いらへもせず。わづかに息の通ふばかりなりけれど、と

いかゞしつらん　心や臆したりけん

飛揚らんずらん

あるにもあらぬやうにて痛み臥せり　命生くべくも見えねば

中納言兼光　藤原兼光。建久二年（一八五一年）検非違使別當となつた。建久六年歿、年五十二。

手をもちてこそねざりありき候へ

かくして坊にかき入れつ。こゝに集れる人、笑ひのゝしりて歸りけり。さてこの僧、あるにもあらぬやうにて痛み臥せり。とかくいふばかりなくて、弟子も恥づかしながらあつかふ間、松の葉ばかりにては命生くべくも見えねば、年比いみじう食ひのきたる五穀をもて、さまゝ〳〵いたはり養へば、命ばかりは生くれども、足、手、腰もうち折りて、起居もえせず。今は松の葉食ふには及ばず、もとの如く五穀むさぼり食ひて、弟子どもにゆゝしく讓りたりし坊も實も取返して、かゞまりゐたり。仙道に至る人、たやすからぬ事なり。（十訓抄）

二　腰居の釜

中納言兼光卿檢非違使別當になりて、廳務殊におこしさたありけるに、いやしきものの小屋に、小さき釜の失せたりけるを、隣なる腰居が盗みたりけるけづきありて、賊物をさがしいだしたりけるに、腰居申しけるは、「手をもちてこそねざりありき候へ。手を離れては、いかでか取り侍るべき。他人ぞ盗みて、置きて侍るらん」と陳じければ、「まことに申すところことわりなり」とさたありけれど、盗まれたるものの訴訟つよくて、大理の門前に召出して内問ありけり。相論事ゆかざりけるに、別當謀をめぐらして、「この腰居申すところ不便なり。たゞこの釜をば腰居に取らすべし」と仰せ下したりければ、腰居よろこびて、頭にうちかづきてゐざり出でけるを見て、實犯なりけり。かたはの身なれども、かくて盗みてけりとさとりて、科に行はれけり。ゆゝしかりける謀なり。（古今著聞集）

いかでか取り侍るべき

二〇　人事と天命

加藤武雄

「人事を盡して天命を待つ」といふ言葉がある。古い言葉である。誰でも知つてゐる言葉であるけれども私は、この言葉程よい言葉を知らない。お前の座右銘はと若し人が問ふならば、私は直ちにこの

加藤武雄　小説家。明治二十一年神奈川縣に生れた。

私は……知らない

低能　高能
消極的　積極的
分に安ずる　小成に安ずる
從容　自若
平凡　非凡
者適

しかし私の努力主義には：伴なつてゐた

二丈の三丈のといふ高さ

無限に伸びん事を欲する

言葉を以て答へるであらう。

人事を盡す――自分の出來るだけの事を一所懸命になつてやる――この點では、私は人後に落ちないつもりである。私は負ける事が嫌ひ、何事によらず後れを取る事が嫌ひである。强情で、瘠我慢な人間である。若し私が、今日までの生涯に於て、何をかなし得てゐるとすれば、偏にこの强情の、瘠我慢の賜である。偏に私の努力主義の賜である。

しかし、私の努力主義には常に大きな煩悶が伴なつてゐた。と言ふのは、どんなに努力しようとも、その結果には限界がある。これを譬へて言へば、牡丹とか、茶の木とか、さういふ木は、どんなに高く高く伸びようと努めても、灌木として約束されたそれ等の木は、他のかしとか、公孫樹とかのやうに、二丈の三丈のといふ高さには伸びられない。木の意志は無限に伸びん事を欲する。しかし、一つの約束

苦しみと……同感とを描いたものであるが

人こそ知らね

がそれを制限する。無限に伸びんとする意志を抱いて、その約束の前に煩悶する。私の半生は、この煩悶のうちにあつた。私は七八年前嗚咽といふ短篇を書いた事がある。學ばうとする意志はありながら、どうしても人並の學問をする事の出來ない低能兒の苦しみと、自身同じやうなこの苦しみを抱く青年教師の、それに對する同感とを描いたものであるが、人こそ知らねこの短篇は、實に當時の私の心の縮圖であつた。

このやうな私の煩悶を和らげてくれた一つの智慧がある。それが「天命を待つ」といふ言葉である。天命卽ち約束である。この約束の前に從順になる氣持、卽ち天命を待つの心である。牡丹は牡丹、茶の木は茶の木としてのそれ〴〵の約束――その約束を素直に受容れて、從容として天命を待つの心、この心にこそ救がある。同じやうな言葉に「足るを知り、分に安んずる」といふのがあるが、この言葉は、

……知つたり……安んじたりしてしまつたのでは

餘りに消極的、退嬰的の山林氣分、隱逸趣味で、初から足るを知つたり、分に安んじたりしてしまつたのでは、世の中に立つて仕事は出來ない。私はこの言葉を好まない。「天命を知る」といふのは、決して「分に安んずる」といふ事ではない。結局は「分に安んずる」といふ氣持に落合ふには違ないが、初から足るを知つて分に安んずるのではなく、大いに努め、大いに戰つて後、始めて天命の如何ともなしがたきを認め、例へば、刀折れ矢盡きて止むなく城を開くが如く、自分の天命の前に、自分の全部を委ねるのである。天命の前に自分を委ねる——こゝに安らぎがあり、和らぎがある。

そしてまた、人事を盡して、それから後、天命を待つ——といふ風にのみ、この言葉を解釋してはいけない。逆に、天命を待つの心を以て、始めて十分に人事を盡す事が出來る——といふ意味に解して、この言葉の味はひは更に深くなるのである。天命を待つ、すべてを

落著の中から……勇氣が生れて來る

うち委せた氣持には落著がある。この落著の中から大いなる勇氣が生れて來る。焦らず騷がず、從容として身を天命に委ねたところから、底つ巖根にうち立てる大勇氣が生れる。この大勇氣を以てこそ、まことによく人事を盡す事が出來るのではなからうか。例へば、かの南洲翁の如き、常に天命を待つの心を以て、あの大きな仕事を成遂げた。南洲翁の大勇氣は、天命を待つの智慧から生れたのであつた。

南洲翁　西郷隆盛。

「人事を盡して天命を待つ」。この語は、「天命を待つの心を以て克く人事を盡す」と言換へてもよからう。

私が四十年の歳月を費して漸く學び得た事は、この分りきつた平凡な事である。

高須芳次郎　評論家。文學博士。梅溪と號した。明治十三年大阪市に生れた。

ペリー　アメリカ合衆國の海將。（嘉永六年（一八五一三年）六月我が國に來た。（西紀一七九四―一八五八年）

ブーチャチン　政治家。海軍軍人。嘉永六年七月我が國に來た。（西紀一八〇三―一八八三年）

井伊直弼　彦根藩主。掃頭部。安政五年（一八五八年）大老となり、萬延元年（一八六〇年）櫻田門外で殺された。

二　尊い獻身の生涯

高須芳次郎

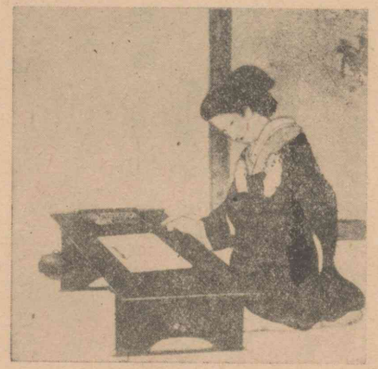
江戸幕末の歴史を見て、何時も深く感動させられるのは、獻身の一生を送られた皇女和宮の御事蹟である。和宮の少女とならせられた時代は、我が國では多難を極めた秋であつた。米國水師提督ペリーが浦賀に來る、續いてロシヤの使節ブーチャチンが長崎に來るといふ有樣で、彼等が世界の大勢を說いて通商互市を求めたに對して、我が國では開港を主張する者と、昔通り鎖國を唱へる者とがあつて、その間に烈しい爭が起つた。時の總理大臣とも言ふべき井伊直弼は開國說に決して、斷然アメリカとの通商條約に調印し、一方攘夷派を手强く抑へ附けて、手當り次第に獄舍へ投込んだので、彼は櫻田の雪と共に消えて世を去つた。

世はかうした有樣であつたが、當時の朝廷が外交に就いて抱か

家茂　紀伊齊順の子。將軍家定に養はれ安政五年將軍職（十四代）をつぎ、慶應二年（二五二六年）二十一歳で歿した。

仁孝天皇　第百二十代。弘化三年（二五〇六年）。有栖川宮熾仁親王。

れてゐた意見と、幕府の考とは一致しなかつた。そこで、幕府に於ては直弼がその事を心配して、朝廷と幕府との間を圓滿にする爲に、內々和宮を將軍家茂の夫人に迎へ奉りたいと朝廷に歎願してゐたのが、直弼の歿後になつて、始めて實現されるやうになつた。



和宮（池田輝方筆）

和宮は仁孝天皇の第八子で、弘化三年の御出生で、六歳の時、有栖川宮と婚約せられたのであつた。それで普通の順序から言へば、當然有栖川宮と御結婚なさるわけであつた。ところが、內外多事の時代となつて、朝廷と幕府との間がらがとかく圓滿を缺くやうになると、朝廷の大臣中にも、それ等の事に心を痛めて、朝幕一和の有樣に立歸るやうにと願ふ者があつた。それは幕府の當局でも同樣であ

家茂の許へ降嫁せられるまで

忘れ給はなかつたであらう

つた。かうした事から、和宮御降嫁の事は次第に話が進んで、たうとう有栖川宮との婚約を雙方の諒解の下に取消す事にせられて、改めて和宮が十六歳の時、十四代將軍家茂の許に降嫁せられたのである。

當時の和宮の御胸のうちはどうであつたらうか。私は何となく無限の感慨に打たれるのである。宮は家茂の許へ降嫁せられるまで、有栖川宮こそ未來の郎君であると思し召して、優しい心のうちにその事のみをひたすら忘れ給はなかつたであらう。それに優しい美しさに滿ちてゐる西の京の情味や風趣に就いても、宮には深い愛を感じてゐられたであらう。

さうした場合に思ひ掛けなくも、江戸へ下つて家茂に降嫁せねばならぬといふ事を、突然廷臣から聞かれた時には、何となく失望と悲しみとの交錯した感じに沈まれたであらう。けれども宮は御

あきらめる（諦）

じつと……忍ばう

天璋院第十三代家定夫人。名は敬子。明治十六年（二五四三年）歿、年四十七。

聰明で、自分が朝廷の爲に江戸へ赴くのであるといふ事を自覺せられると、もう悲しんではゐられないとあきらめられた。

をしまじな君と民とのためならば
身は武藏野の露と消ゆとも

宮が詠出でられたこの一首の歌を誦すると、その胸のうちで雄雄しくも、自分の運命に就いて樂觀せられると共に、どんなに苦しくとも、悲しくとも、朝廷の爲、天下の爲によい事ならば、自分獨りじつとそれを忍ばうと決心せられた御樣子がよく分る。

その後、宮は未だ馴れ給はぬ長途の旅に上られて、事なく江戸に著かれた。そして家茂夫人となられた。宮と夫君家茂との間は、春風の吹くやうに美しく暖かかつた。だが前將軍夫人天璋院が、とかく宮に對して冷い態度を以て臨んだ事は、未だ世の中の荒い風に當られない宮にとつては、かなりに苦痛であつたらうと思はれる。

宮の御心に寂しい物足りなさを印象したであらう

だが家茂もまた……餘裕に乏しかつた

普通の暗君ならば堪へきれないであらう

それに當時の幕府は、財政の上に行惱んでゐて、宮が好まれた大御所風の生活も、思ふやうに實現される便宜がなかつた事は、宮の御心に寂しい物足りなさを印象したであらう。一體に宮は、運命の上に於て幸福でなかつたのである。

家茂は心から宮を愛した。宮にはそれが何よりの心強さだつた。だが家茂もまた內外多事の時代であつたから、思ふやうに家庭の平和を樂しむ餘裕に乏しかつた。困難な問題が引續いて起つて、家茂の心を惱ましがちであつた。

家茂は德川歷代の將軍のうちで、一番悲劇的な人であつた。平凡な歷史家は一概に家茂の人物が暗弱だつたと言ふが、未だ二十歲に達しないうちに將軍となつて、空前の多難な時に逢つたのだから、普通の暗君なら、とても一日だつてそれに堪へきれないであらう。

彼は確かに……將軍であつたのだ

慶應二年
一五二六年。

長州征伐
江戸幕府の一事變。元治元年（一八六四年）長州藩士の輕擧に對し幕府は朝命を奉じ長州を征伐した。

文久三年
一五二三年。

けれども家茂は、朝廷との間をも圓滑にして、外交問題にも見苦しい失策を取るまいと、いろ〳〵に心を碎いた。彼は確かに純な、多感な、そして割合に賢い將軍であつたのだ。たゞ意志が少し弱かつただけである。

宮は家茂の性格やその周圍を見て、心から家茂に盡さうとせられた。文久三年家茂が入洛する時には、和宮もまた共に西の京へ赴かれた。そして家茂が大阪城に入つた時には、宮も蔭ながら內助の功を立てられた。

だが宮にとつても、家茂にとつても、この上ない不幸が湧いた。それは慶應二年八月家茂が、その志した長州征伐が一段落をも告げないうちに病んだ事である。新秋の風は冷く家茂の病床に吹いた。そして彼の病は一日ごとに重くなつて、たうとう八月二十日に薨じた。この時の宮の悲しみはどんなに深かつたであらう。空に澄む

宮は一生寡婦として暮さうと決心せられた

月の色も、叢の中に鳴く蟲の聲も、皆哀愁を誘ひ出すよすがとなつたであらう。

溫かい愛のもとに互に平和を樂しまれた宮は、家茂を失つてから、急に寂しさが身にしみるやうに思はれた。世の中のあらゆる悲痛が宮の上に集つたやうに、盡きぬ涙に袖をぬらされた。その時宮は二十一歳であつた。宮は一生寡婦として暮さうと決心せられた。そしてその美しい黑髮を惜氣もなく切つて捨てられた。あゝ、かうして後に生殘つてゐるよりは、いつそ夫君と一緒にあの世へ行つた方が、どのくらゐ幸福かも知れない。生の悲痛、生の寂寞、それはもう堪へられないと宮はうち惱まれた。

みつ瀨川世のしがらみのなかりせば
　君もろともに渡らましものを
世の中の憂きてふ憂きを身一つに

管絃のこゝろを梓ゆみ春をさへつるうくひすにしらへかよはす松かせのこゑ

とりあつめたる心地こそすれ

これ等の歌を讀むと、宮のいたましい御有樣が眼に見えるやうである。この時分から宮は靜寛院と稱せられた。

その後時勢が幾たびも急變して、幕府の亡びる日が愈近附いた時、宮はあくまでも、幕府と朝廷との關係を和げる事に就いて御心を盡す事を惜しまれなかつた。家茂薨去の後は、幕府と宮との關係は以前のやうではない。京都では、宮が幕府を離れて歸られる事を切に望んでゐたし、朝廷でも、宮の御身の上を非常に氣遣はれたのである。けれども宮は、一旦家茂夫人となられた以上、貞婦としての道を全うして行く爲に、やはり最初降嫁せられた時のやうに、朝幕

和宮御筆讀

……時代になると……わびしい日を送られた

宮の御決心の雄々しさ高潔さは……現れてゐるが

の一和を計るのが自分の務だとせられた。そして十五代將軍慶喜の爲には特に力を添へられて、寛大の處置を執られるやう、親しく朝廷に歎願せられた。

宮の心を籠められた歎願は、確かに朝廷を動かした。慶喜はそれを深く感謝した。そのうち王政維新の時代になると、宮は極めて質素な生活をして、わびしい日を送られた。そして京都からたびく〳〵お迎の使者が來たけれども、德川家の前途をはつきり見屆けるまでは、歸らうとせられなかつた。

宮の御決心の雄々しさ、高潔さは、その侍女以下に與へられた布告書の中に、凜然として現れてゐるが、その中で、「それ人たるものは、匹夫匹婦と雖も五倫の道正しく守るべき事は、衆の知るところに候。我苟も民の父母たる至尊の血脈に生れ、天下の政務を天子より御委任あらせられ候武將の妻たる身にて、この五倫の道失ひ候は

龜之助　德川家達。慶頼の第二子。

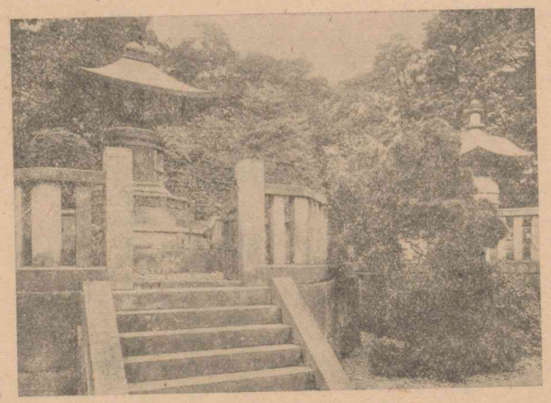
明治二年　二五二九年。

宮の御一生は……歴史である

ば、孝貞共に立ちがたしと心得居り候へども、何分不肖の身、素志も衆人には顯しがたく、慚愧に堪へず候」。と言つてをられる。宮はこの決心で江戸にとゞまつてをられたが、龜之助が慶喜のあとを繼いで新しく駿河に封ぜられた事を聞いて、ほつと安堵せられた。

その後明治二年に入洛せられて、父帝の御忌をも修められた後東京に歸られ、麻布に住んでをられたが、明治十年病んで、三十二歳で薨ぜられたのである。

宮の御一生は、美しい清い愛と、犧牲獻身の誠とを現された歴史



家茂の廟と和宮の御廟

……事に……同情を捧げたいと思ふが

平凡に幸福な生を送るところの女性

鯛屋貞柳　本名覆盆善八。油商。大阪の人。享保二十年（二三九五年）歿、年八十。

である。家茂の歿後、深い悲しみにもうち勝つて、よく徳川家の前途を見屆けられたのは、りつぱな男子さへも及ばない雄々しい御心を示されたものである。私は宮の御一生が――殊に後半生が――寂しい色で包まれてゐる事に限りない同情を捧げたいと思ふが、またさうした苦しい寂しい運命に逢はれた宮が、平凡に幸福な生を送るところの女性よりも、遙かに尊い充實した生を送られた事に對して、深い敬仰の情を捧げたく思ふのである。

三三　ふじの山（狂歌）

ふじの山夢に見るこそ果報なれ
　路金もいらずくたびれもせず

鯛屋貞柳

唐衣橋洲　本名田安家の士。本名小島源之助。江戸の人。享保二年（二四七七年）歿、年六十。

朱樂菅江　本名山崎景貫。江戸幕臣。寛政十二年（二四六〇年）歿、年六十三。

四方赤良　本名大田覃。江戸幕臣。南畝または蜀山人と號した。文政六年（二四八三年）歿、年七十五。

宿屋飯盛　本名石川雅望。江戸の人。天保元年（二四九〇年）歿、年七十八。

大屋裏住　本名久須美祐明。江戸の人。文化七年（二四七〇年）歿、年七十七。

菜もなき膳にあはれは知られけり
　しぎやき茄子の秋のゆふぐれ

唐衣橋洲

天の原月すむ秋をま二つに
　ふりわけ見ればちやうど仲麿

朱樂菅江

ほとゝぎすなきつるあとにあきれたる
　後德大寺の有明のかほ

四方赤良

歌詠は下手こそよけれ天地の
　うごき出してはたまるものかは

宿屋飯盛

大屋裏住

うぐひすも蛙もおなじ歌なかま
　經よむもありたゞ啼くもあり

鹿津部眞顏

鹿津部眞顏。本名北川嘉兵衛。狂歌堂と號した。江戸の人。文政十二年（一八二九年）歿、年七十九。

あらそはぬ風の柳の絲にこそ
　堪忍ぶくろ縫ふべかりけれ

平秩東作

平秩東作。本名立松懷之。東蒙と號した。江戸の儒者。寛政元年（一四八九年）歿、年六十四。

ゆく春を思ひきれとや舞臺から
　飛んで見せたる清水のはな

つむり光

つむり光。本名岸宇右衛門。江戸の人。寛政八年（一四九六年）歿、年四十三。

ほとゝぎす自由自在にきく里は
　酒屋へ三里豆腐屋へ二里

栗柯亭木端

栗柯亭木端。僧侶。狂歌師。本名未詳。大阪の人。

世の中をなんのへちまと思へども
　ぶらりとしてはくらされもせず

馬場金埒

馬場金埒。江戸の狂歌師。本名大阪屋甚兵衛。文化四年（一四六七年）歿。

雪ならばいくら酒手をねだられん
　はなのふゞきの志賀のやまかご

水上瀧太郎

水上瀧太郎。小説家、實業家。本姓名は阿部章藏。東京市の人。昭和十五年歿、年五十四。

二三　親の心

ひと夏を逗子で暮した優藏は、眞黑になつて歸つて來た。留守番をした父親に、面白かつた逗子の話を聞かせようとするのであるが、意餘りあつて言葉足らず、「ね、ね、ね、ね」と何時までも相手に呼びかけながら、結局話にならないでおしまひになる事もあれば、「えゝと、えゝと、優ちやんね、逗子に行つた。おもちろかつた」と冒頭から直ちに結論へ飛んでしまふ事もある。しかし、海の偉大と、トンネルの不思議と、大船驛で買つた鯛めしのうまさは、この夏の間の彼

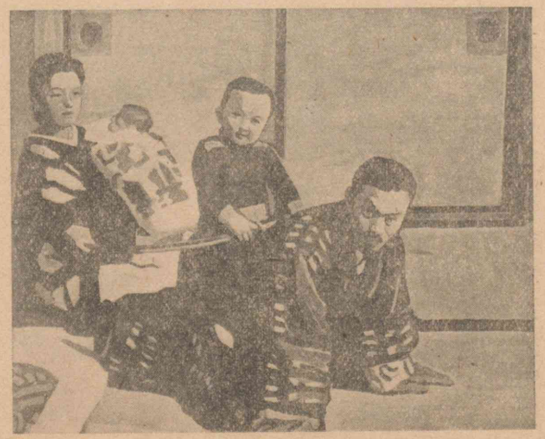
逗子。神奈川縣三浦郡逗子町。海水浴場として知られてゐる。

大船驛。神奈川縣鎌倉郡大船町。東海道線と横須賀線との分岐驛。

朝目がさめると……轉げ廻り……ばた〳〵やるのが

の經驗の中で、最も忘れがたいものとなつたのである。

朝目がさめると、蚊帳の中であつちこつち轉げ廻り、殊に蒲團の外の疊の上で手足をばた〳〵やるのが、海の思出を樂しむしぐさで、時時「波が來た」と叫んで母親の懷にもぐりこむ。トンネルの方は、座敷の眞中に立ちはだかり、大の字の形でこれを示すのであるが、その股ぐらに玩具の汽車を通させたり、父親にくぐれと命令したりする。親馬鹿は忽ち四つ這ひになり、「どうがつたん、どうがつたん」と言ひながら、トンネルに頭を突つ込むのである。子供は有頂天になつて喜び、トンネルの



觀　心（水船三洋集）

教はつたり……乘たりして

位置を變へては、東京、品川、横濱、鎌倉、逗子と、知つてゐる限りの驛名を叫ぶのであるが、汽車は屢〻鯛めしを聯想させ、「おいちいかつたねえ」と眞劍になつて親の顏を覗きこむ。

子供に對する私どもの自戒の一つは、なるべくものを教へないといふ事だが、遊び相手の女中に教はつたり、往來で聞嚙つて來たりして、とんでもない事を口走る。眞面目な顏をして、「アイウエオカキクケコ」と、何の事か譯も分らずに叫んでゐるかと思ふと、「アラヨイヨイヨイ」と轉向して行く。一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十、十一、十二と數へ、誰に教はつたのであらうと驚いてゐると、その次は「十三七つ」と歌つてけろりとする。

凡そ世の中に「ホワイ」と「ハウ」がなければ進歩はないと言はれるが、智慧の附く盛りの子供にとつては、あらゆる事が「何故」であり、「どうして」である。「お父ちやま、どこへ行くの」と殆ど毎朝聞く。會社へ行

丸の内　東京市麴町區丸の内。

三田文學　慶應義塾大學文科の機關雜誌。明治四十三年五月創刊。大正十四年一時休刊。同十五年再刊。

くの。」と答へると、「どこの會社。」とか、「何の會社。」と疊みかけて來る。この返答は頗るむづかしい。何故かと言へば、子供の理解の屆く範圍内で、適當の返事を見出さなければならないからである。「丸の内の會社。」などと言つたのでは返事にならない。止むを得ず「東京驛のそばの會社。」と言ふと肯いてくれる。「お父ちやま、何してるの。」と言ふのに對して、「御本讀んでるの。」と答へると、必ず「何の御本。」と來る。「三田文學を讀んでゐるんだよ。」では返事にならない。「お話の本。」と言ふと、「何の御話。」と、どこまでもきりがない。「いろんなお話。」と逃げても、「何のいろいろ。」とあくまでも追ひかけて來る。苦しまぎれに、「子供には分らない御話。」と言ふと、甚だしく不滿足で、「優ちやん分る。」と怒つた顏をする。試みにこつちからも質問してみた。「優ちやんこの間どこへ行つたの。」と言ふと、即座に「逗子。」と答へたから、こゝぞとばかり、どこの逗子だと聞いた。恐らくこれには困つて、海の逗子だとか、汽車の逗子だとか言ふだらうと思つてゐると、子供の頭には迷がなく、言下に「葉山の逗子。」と答へた。尤もちよつと間を置いて、「優ちやんねえ、鯛めしみんなお姉ちやんにやつちやつた。」と附加へた。例の大船の鯛めしを思ひ出したので、お姉ちやんといふのは親類の子供の事である。

葉山　神奈川縣三浦郡葉山町。逗子の海岸つゞきになつてゐる。

大人の食べる物を食べてみたい欲望は頗る強い。

父母と同じ食卓で、優藏だけは、いたづらをしないやうに籐椅子の上に乘つて食事をするのであるが、大人の食べる物を食べてみたい欲望は頗る強い。殊に漬物の茄子や生瓜の色彩は目をひくものとみえ、「優ちやんもお漬物食べる。」と毎日せびるのである。これは子供の食べる物でない。」と言ふと、大概は一度であきらめるが、つむじを曲げると、「優ちやん、もう大きくなつた。」と言つてきかない。漬物は三度々々目に觸れるので、始終頭を去らないらしく、何かの拍子に、「大きくなつたら。」といふ言葉を聞くと、直ぐにそいつを思ひ出す。

してはいけないといふ事をわざとしたり…反對したりする

「優藏も大きくなつたら學校へ行くのだ。」と言ふと、「そしてお漬物食べるの。」と附加へるのである。

してはいけないといふ事をわざとしたり、大人の言ふ事にわざと反對したりするのも、今日此頃の道樂の一つである。「そんな事をしてはいけません。」と言ふと、「していゝのよ。」と言ふ。「優藏はいゝ子だからよしませうね。」と言ふと、「優ちやんいゝ子でない。」と言ふ。親類へ遊びに行く時、「向ふの子供と仲よくするんですよ。」と言ひ聞かせると、「いや、けんかんする。」と叫ぶ。どこかで聞きかじつた唱歌の一くさりに、「ごめん下さい花子さん。」といふのがあつて、得意になつて繰返すから、父親も聲を合せて歌ふと、「違ふ、花子さんでない。優藏しやまだ。」と言ふ。そんならさうしようと、「ごめん下さい優藏さん。」と歌ふと、「優藏しやんでない。花子さんだ。」と言ふ。花子さんと言へば優藏しやまだと言ひ、優藏さんと言へば花子さんだと言ひ張つて際限がな

養和元年一八四一年。
一萬　兄曾我十郎祐成の幼名。
箱王　弟曾我五郎時致の幼名。
母　夫祐泰の死後祐信に再嫁した。
曾我殿　祐信。

いゝ。それ程曲つたつむじも何時か眞中に收まつて、親と子が一緒に歌ふ時こそ親馬鹿の仕合せである。

（親馬鹿の記）

二四　空行く雁

頃は人皇第八十一代安德天皇の養和元年、あらたまの年立返りて一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。まことやらん、父の御事は佛になつてましますとや。その佛はいづくにましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたる來し方も、今更思ひ出されて、消入るばかりなり。母泣く〳〵宣ひけるは、「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ。」と心強く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん狩場より歸り給

工藤一萬祐經。

鎌倉殿源頼朝。

この里　相模國（神奈川縣）足柄下郡下曾我村。

三つにてらんぬかくの如し　子供はぞあるいは鳥類にだもの

河津殿三郎祐泰。

ふ途にて、工藤一萬とやらんに射られて死に給ひぬと、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿の切者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等がこの里にあるを知らでや過ぐらん。」などおとなしく語りければ、母よりはじめて女房たちまで、皆袖をぞしぼりける。

かくて夏も過ぎ秋もたけ、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたるかりがねの、南をさして飛行くを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ箱王殿。空を飛ぶつばさも別のつばさぞまじへざりける。五つ連れたるは、一つは父、一つは母、三つは子供にてぞあるらん。ものいはぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、わ殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿はまことの父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬、鞍

何時より今宵は父御前のこひしくおはしますぞや

をも賜はり、弓、矢をも持ちて、今ぞ思ふやうにものを射ありきなん。我等より幼きものにても、馬、鞍、弓、矢をもてものを射ありく事の羨ましさよ。これ等の事ども思ひつゞくれば、何時よりも今宵は父御前のこひしくおはしますぞや」とて、袖に顔を差入れてさめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顔を合せて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし。人もこそ聞け。いかにわ上萬たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とく〳〵入らせ給へ」と恐しげにいひければ、二人の者は門外に逃出でて、思ふやうにあくまで泣きて後に、内に入り

曾我兄弟（飛田周山畫）

にけり。

その後は、二人のものども我が身の程を知りぬれば、世に亡き父を慕ひつゝ、語り合するまではなけれども、たゞ目ばかりを見合せて、互に袖をぞぬらしける。或時兄弟は、竹の小弓に薄はぎの小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬、箱王に申しけるは、我等も何時か成長して、わ殿は十三、我は十五にだにもならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く差合ひ射取りて後には、ともかくもなりなん。わ殿も弓をよく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。といひければ、弟もうちうなづきけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。

（異本曾我物語）

遠侍　おもやからずゝしたはなれた屋敷

弓矢は男の一の能にてあるなるぞ

二五　三つの眺

沈めば…照る

休息　安靜の夜には最もふさはしいこと

うちむかふ云々　賀茂眞淵の門人荷田蒼生子の作。

煌々たる活動の日の光西に沈めば、玲瓏たる一輪の月休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見る事も出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。慈愛の光である。炎熱を伴なはない清涼の光である。皎潔、無垢、崇美と稱ふべき優しい光である。休息、安靜の夜には最もふさはしいこの光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と鬪つてゐる熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國のやしの蔭、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光の、人の胸懷に浸みわたる事は、恰もその影の、千草の露の玉ごとに宿るやうなものである。うちむかふ月は一つの影ながらう

月は地球の衛星で全く死んだ冷塊である

花ならば云々　新續古今集、僧仙覺の作。

三千世界云々　唐の詩人白樂天の詩句。

かぶは千々の思なりけり」である。

東西古今、悲喜哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち滿ちてゐる。天文學者は言ふ、「月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である」と。この冷い光が、古往今來どれ程の暖かみを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

雪は月よりも一層冷い。貧富貴賤の差別なく、その純潔な色を以て乾坤を一つにする事は、月に似た點が多い。高樓、茅屋も皆同じ色に埋められる。「花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪降るみ吉野の山」といふやうに、眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。「三千世界銀色を成し、十二樓臺玉層を作す」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏にあるの感を抱かしめる。天

霏々と散り紛紛と飛んで瓊玉を敷く

極樂淨土は……樂しいものではなからう

から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感じられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、たゞ一條の川水を殘して、山と言はず、野と言はず、瞬くうちに瓊玉を敷く莊嚴な觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉いろ〳〵な眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新綠の色も、目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではないか。一年中蓮の花の咲いてゐる極樂淨土は、決して我等の世界ほど樂しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れ

花は……匂さへもつてゐる

人世に花なくんば花なし

死んでも花とは緣が切れぬものである

花をし見れば云云「年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見ればものおもひもなし」（古今集、藤原良房）

るのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、香しい匂さへもつてゐる。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へてゐる。富貴の庭園に培ふ花に價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月雪と同じやうに、一文錢を要せぬのも嬉しい。人世に花なくんば、どれ程寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間の一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を愼んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。死んでも花とは緣が切れぬのである。月雪の眺はその皎潔を愛し、その清淨を貴ぶが、花はその艶麗華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花々し、華美、華麗、華奢等の語は、皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚かである。余はたゞ「花をし見ればものおもひもなし」といふ古歌を以て、すべてを總括し得べしと信

やま櫻云々　新古今集、康資王の母の作。

ふゆながら云々　古今集、清原深養父の作。

笠は重し云々　謠曲「葛城」の句。

ずる。

月雪花三つの眺には各その特長がある。いづれを前、いづれを後と言ふ事は出來ぬ。

やま櫻花の下風吹きにけり
　木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪に譬へたのである。

ふゆながら空より花の散りくるは
　雲のあなたは春にやあるらん

これは雪を花に譬へたのである。

笠は重し吳山の雪。鞋はかんばし楚地の花、肩上の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とに譬へたのである。

花を賞して月を愛せぬ人はない。月、花を愛して雪を賞でぬ人も

我等日本人の……尊を得るのは

世々を經て云々伊藤仁齋の作。

年年歳歳云々唐の劉廷芝が「白頭を悲しむ翁に代りて」の詩句。

ない。思へ、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に閉されてゐる極北の國では、氷は卽ち人の家である。この地方の人には寸紅の目を樂しましめるものもない。またこれに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見た事がない。ガス、電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見る事が出來ない。我等日本人の、昔も今もこの三つの眺を擅にする事を得るのは、眞に天與の幸福ではあるまいか。

月雪花の眺は古人の歷史が加つて一層の感興が增す。「世々を經てながめし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月」月は古來の歷史を照す鏡である。「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」人生の感は花を見て益繁く、雪を見て愈多い。二千六百年來、月雪花三つの眺を有し得た我等祖先の遺跡は、いかに多くの感興を我等に傳へたるよ。いかに多くの追慕を我等に催さしむるよ。

女子新國文 改制新版 卷五 終

昭和七年五月十七日初版印刷
昭和七年五月二十日初版發行
昭和七年十月五日訂正再版發行
昭和十年六月二十五日訂正三版發行
昭和十年十二月八日訂正四版發行
昭和十二年六月二十八日訂正五版發行
昭和十二年十二月二十日訂正六版印刷
昭和十二年十二月二十四日訂正六版發行
昭和十六年十二月二日訂正七版印刷
昭和十六年十二月六日訂正七版發行
昭和十八年七月十四日訂正八版印刷
昭和十八年七月十八日訂正八版發行

女子新國文 改制新版
定價卷五 六拾錢

編者　芳賀矢一
訂補者　橋本進吉
發行者　東京都神田區岩本町三番地　中等學校教科書株式會社　代表者　山本慶治
印刷者　東京都牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地　大日本印刷株式會社　代表者　寺井藤左エ門
發行所　東京都神田區岩本町三番地　中等學校教科書株式會社
日本出版會會員番號一一七五二二

配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町2ノ9

（略名）富山芳賀女國五

三年又組

植田桂子

広島大学図書
2000301755